美術学部

近現代美術史・大学史研究センター Geidai Archives Center of Modern Art

年報・紀要

令和3年度(2021)

目次

1、所蔵資料数		3
2、新収資料		5
3、資料活用実績		10
4、年間活動		14
5、資料紹介・研究報告		
明治期の東京美術学校 一教育課程と修	学状況を中心に一	
	浅井ふたば	20
明治期の卒業式と生徒成績品展覧会	芹生春菜	27
【新収資料】南米岳関連資料(熊谷祐子氏	寄贈)一括	
	古田 亮	38
【研究会発表要旨】		
東京美術学校在籍者一覧一作成意義と活	用に向けて一	
	浅井ふたば	50
記録と証言による東京芸術大学取手校地	史の構築の試み	
一継承のかたちを求めて	田中ジョン直人	52
6、名簿		54

1、所蔵資料数

大学史史料	
東京美術学校及び東京藝術大学美術学部の歴史について記録された学内資料。	約 2,000 点
寄贈資料	
東京美術学校及び東京藝術大学美術学部に関係する個人や団体から寄贈された資料。	
久保田鼎資料	148 点
上野直昭資料	約 3,000 点
大村西崖資料	2741 点
六角紫水資料	975 点
斎藤佳三資料	約 300 点
辻茂資料	11 点
三好二郎資料	書架延長 0.6m
中村勝馬資料	約 1,100 点
吉田千鶴子資料	書架延長 7.5m
藤巻嘯月資料	42 点
原安民資料	3 点
小島光真資料	13 点
西方俊資料	1点
田中暎郎資料	1点
川瀬勝蔵資料	1点
高島七郎資料	1点
小場恒吉資料	1点
南米岳資料	1点
田中ジョン直人 東京藝術大学取手校地関連資料	1点

注:整理・登録済みのもの。今後整理状況に応じ変更の可能性がある。

図書資料	
	1401 点
図書	532 点
雑誌	482 点
図録	238 点
その他	149 点

注:整理・登録済みのもの。今後整理状況に応じ変更の可能性がある。

データ作成:浅井ふたば、工藤沙貴、高柳祿

2、令和3年度新収資料

- ①白濱徵写真(寄贈)
- ②南米岳資料 (寄贈)
- ③東京美術学校図書印·東京美術学校文学部印(新規登録)
- ④田中ジョン氏収集取手キャンパス関連資料 (寄贈)
- ⑤書籍等(主なもの)

①白濱徵写真(Jethro Meriwether Hurt 氏寄贈) 1葉

(台紙貼り:14×10cm 台紙 20×15cm)

東京美術学校卒業生(明治 27 年[1984]、絵画[日本画] 卒)で図画師範科教員、白濱微(1865-1928)の肖像写真。フロックコートにステッキとハットを携えた正装姿でスタジオで撮影された写真で、台紙に貼り込まれている。台紙裏面にインクで「Akira Shirahama」「Paris, 1906」「Prof. Imperial Art Sch., Tokyo, Japan」の書き込みがある。本写真をアンティークショップで購入した海外在住の所有者から GACMA に照会があり、寄贈を受けるに至った。台紙の表裏面の印字により、フランスのパリ・サンジェルマン大通り147番地にあった写真店「ポール・ダービー(Paul Darby)」による撮影と知られる。

ポール・ダービーについては、元の名をポール・ヴィクトル・ラクロット (Paul Victor Lacrotte, 1874-1925)といい、1900 年頃からパリのストラスブール大通りで開業し、後にセーヌ右岸のサンジェルマン大通りにも店を構えた写真家の存在が知られ、当該資料はこの写真店のスタジオ撮影と思われる。

白濱微は日本の美術教育学の泰斗で、明治34年 (1901)より美校で教鞭をとり、同40年に図画師範科 が設置されると主任教授に就任、美術教育法の伝授と 人材育成に功績を残した。図画師範科設置に先立つ明 治37年に欧米に留学し、アメリカ、イギリス、フラン



白濱徴写真 [上]表面 [下]裏面



ス、ドイツと歴訪している。白濱の留学は校長正木直彦の指示によるもので、図画教育の 分野では初の国費留学生であった。

各地の滞在は同年3月から翌38年8月がボストン、その後同9月にロンドン、同年末にパリ、翌39年4月にドイツへと移動し、同40年3月に帰国した。ボストンでは1年半の滞在期間にマサチューセッツ州立師範学校に入学し、フェノロサやアンソニー・ウェズレイ・ダウ(1857-1922)の提唱した図画教育法を学んだ。ここで得た知識や経験の影響は最も大きく、帰国後に編集に参加する国定教科書『新定画帖』にも多くの新教材をもたらしたことが指摘されている。その後に移ったロンドン、パリの滞在期間はそれぞれ約3、4ヶ月と短く、最後のドイツが約1年となるが、白濱は各国の美術教育法について述べる中で、富国第一で絵画より応用的な図案の教育が盛んであった米英に対比して、フランスはもっとも美術専門の教育が進んでおり、普通教育的ではなく専門小学校から専門学校まで一貫教育を行うことなど、その独自性を指摘している。

他都市と比べて長期でこそないものの明治 38 年(1905)の年末から翌年の 4 月の間に 白濱がパリに滞在したことは確かであり、本資料にインクで書き込まれた 1906 年の年記 と矛盾しない。

なお白濱が留学の成果として持ち帰った書籍や資料、教材類、各国児童の成績品等は図画師範科に保管されていたが、明治44年の東京美術学校火災で全て消失したという。本資料は白濱が留学先で学んだ内容や研究成果とは直接関係なく、残念ながらこの消失を埋めるものではないが、これまであまりクローズアップされることのないパリ滞在の一コマを示す資料として興味深いものである。(芹生)

<参考文献>

"Paul DARBY"< https://www.portraitsepia.fr/photographes/darby/> (Portrait Sépia-- Des photographes en France(1839-1939)< https://www.portraitsepia.fr/> 最終確認日:2022 年 3 月 31 日)

「明治 38 年 関連事項③ 白濱微の留学」「明治 40 年 関連事項② 図画師範科設置」『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第 2 巻』(ぎょうせい、1992)、pp.273-275, 386-384。 「留学中の白濱〔微〕教授」『東京美術学校校友会月報』第 4 巻第 7 号(明治 39 年 3 月 31 日

発行)。『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』、p.336 に再録。「同氏は昨年英国から仏国へ転学し、目下同地に留学中なるが、来四月よりは獨逸へ転学の見込なりといふ、現今宿所左の如し。c/o Japanese Legation, 75 Avenue Marceau, Paris,」

金子一夫『近代日本美術教育の研究 -明治時代-』中央公論美術出版、1992、pp.359-363。

②南米岳関連資料(熊谷祐子氏寄贈) 一括

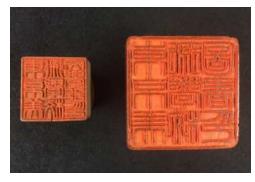
明治末から昭和初年にかけて美術団体「巽画会」を運営し、日本画家たちを支援した南米岳(1870~1932)に関する一括資料。詳細は38ページの古田亮による解説を参照。

③東京美術学校図書印・東京美術学校文学部印

2 顆 (各 5.8cm×5.8cm, 3.2cm×3.2cm)

当センターに所蔵される印鑑 2 顆を、このたび あらたに東京美術学校に関連するモノ資料として 新規登録する。いずれも木製の朱文方印で、それ ぞれ東京美術学校文庫、東京美術学校校友会で使 用されたものと見られる。

「東京美術学校図書印」【図右】は文庫で使用された、おそらく蔵書印であろう。文庫は図書、標本および生徒成績品を収蔵する部署で、明治32年9月制定の「東京美術学校文庫規定」に詳述される。現在でいう図書館と収蔵庫を合わせた機能を担っ



[右]東京美術学校図書印 [左]東京美術学校文学部印

ており、書籍や教材、教員や生徒による制作品等の収蔵や保管のほか、必要に応じて閲覧対応も行なっていた。戦後になり、国立学校設置法公布により東京音楽学校図書課と統合され附属図書館が設置(昭和 24 年)され、文庫という名称は消滅した。なお附属図書館からさらに芸術資料部門が独立して芸術資料館が発足(昭和 45 年)、これが現在の大学美術館(平成 10 年)の母体となった。

したがって本資料が印として有効だったのは昭和 24 年までであるが、実際に使用された期間は不詳である。

一方の「東京美術学校文学部印」【図左】は、簡易なボール紙製箱つきで、中に平成2年2月10日付の泉宏尚氏(元芸術資料館職員)への聞き書きを記録した紙片(当時の芸術資料館の忠利二・芸術資料係長による)が同封されている。それによるとこの印は、川路誠(柳虹)や高村豊周を中心に文学活動を行なっていた美校校友会の文学部の印ではないかという。

校友会文学部及び文学活動については『百年史』に詳しい記事がある。文学部は明治 35年(1902)6月、校友会改革(会長を新校長正木直彦とした)の時に発足するが、活動 が低調であったため同40年3月に有志が再興し、大村西崖が部長となった。

明治 35 年の改革以前より校友会会員(美校生徒、教員、卒業生によって構成される) の中で文学趣味のある者が短歌の会を開き、佳作を機関誌『校友会雑誌』に投稿するなど していた。この当時活躍していたのは香取秀真、原安民、平子鐸嶺、高村光太郎といった 人々である。校友会改革の後に発刊された『校友会月報』誌上にも、漢文、短歌、俳句、 散文などに活発な寄稿が見られた。

このような中で規則だけは制定されていたものの活動は空文化していた文学部について、西洋画科の学生中溝四郎らが中心となって再興の運動を起こしたという。再興文学部は講演会の開催、詩歌散文の創作、新刊文学雑誌の購読などの活動を行ない、とくに講演会は第1回の夏目漱石、上田敏を皮切りに当代の著名な知識人を招き、学生の関心を集めた。

明治30~40年代は文学界の活況が創作を目指す美校生に与える影響が大きく、一般にも文学雑誌が美術雑誌を兼ねるなど、雑誌を舞台に文学論と美術論、演劇評論、散文、自由詩などが活況を呈した。こうした背景もあり、高村光太郎、弟の高村豊周、川路柳虹らによる学校の内外での目覚ましい活躍が見られた。川路柳虹(1888-1965,大正4年日本画科卒)は入学前から口語詩で文壇に名を知られ、『路傍の花』『かなたの空』等の詩集を次々に発表するかたわら、明治43年3月から『校友会月報』の編集委員もつとめ、文芸を愛好する会員とともに美校の文学活動を牽引した。『露光集』『おきなぐさ』などの歌集でも知られる高村豊周(1890-1972,大正4年鋳造科卒)は在学中から与謝野鉄幹・晶子夫妻に師事して短歌に秀でたが、彼の存在が兄光太郎ら気鋭の文筆家と美校生徒を結ぶ役割を果たしたとも指摘されている。

文学部は豊周卒業以後さびれ、大正9年には文芸部と改称された。「東京美術学校文学 部印」も具体的な使用時期は不明だが、美校生徒の往時の盛んな文学活動を物語る貴重な 資料である。(芹生)

<参考文献>

「明治 32 年東京美術学校年報 規定 東京美術学校文庫規則」『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』pp.22-24。

「校友会文学部再興」『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第 2 巻』pp.388-396。

④田中ジョン氏収集取手キャンパス関連資料 一括

1991(平成 3)年に開設された東京藝術大学取手校地の設置経緯にかかわる資料。

東京藝術大学(以下、藝大)取手校地とは、茨城県取手市に位置する藝大の第2キャンパスである。藝大は昭和62 (1987) 年に取手市小文間の164,401平方メートルの土地を取得し、1990 (平成2)年に共通工房棟、1991 (平成3)年に専門教育棟、福利施設など主な施設を整備した。1995 (平成7)年に美術学部1年生の大半が学ぶ共通カリキュラムが開設され、1999 (平成11)年に取手校地を活動拠点とする先端芸術表現科が開設された。取手校地開設から約30年を経た現在、先端芸術表現科と大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻が配置され、多様な研究活動が行われている。

本資料群は公文書等の写し(71 点)と刊行物(43 点)に大別され、資料年代は 1980(昭和 55)年から 2021(令和 3)年である。公文書等の写しの大部分は、資料作成者が情報公開制度に基づいて藝大に開示請求した法人文書の写しである。施設整備のための概算要求書、評議会記録、美術学部及び音楽学部の教授会記録が主な内容である。また、取手市に開示請求した行政文書の写しも含まれ、取手校地開設に至る経緯について詳細に追うことができる。刊行物は、藝大取手校地に関連するパンフレット類、取手市の文化活動・観光に関連するパンフレット類や雑誌(コピー含む)である。郷土の歴史も含めた取手校地の周辺地域の資料を収集した点に本資料群の特徴がある。

本資料群は、藝大大学院グローバルアートプラクティス専攻を 2021 年に修了した田中ジョン直人(現在、藝大大学院国際芸術創造研究科特任助手)が修了論文「記録と証言による東京芸術大学取手校地史の構築の試み-開校までの経緯を中心とした「小文間の藝大第2キャンパス」の意味付け-」を執筆した際に収集したものである。藝大の歴史に関する記録は一元管理すべきという資料作成者本人の希望により、2021(令和3)年9月24日、当センターに寄贈された。(浅井)

⑤書籍等(主なもの)

- (1) 『阿部家三百五十年之歴史』(阿部昭治著,1980.1)阿部光治(明治 33 年彫刻科卒業)関連資料として田中脩治氏[遺族]より寄贈)
- (2) 光井渉教授(美術学部長、建築科教授、本センター運営委員)より、本学建築科の歴史に関する諸資料を寄贈いただいた。
- ・『匠美会会員名簿 平成 15 年度』匠美会事務局、2003
- ・『匠美会会員名簿 平成20年度』匠美会事務局、2008
- ・『吉村順三先生の思い出』東京芸術大学美術学部建築科同窓会匠美会、2006
- ・『KENCHIKUKA [ケンチクカ] 芸大建築科 100 年 建築家 1100 人』(芸大建築科 100 年史年表付属)東京藝術大学建築科百周年誌編集委員会編、株式会社建築資料研究社、2007
- ・『建築科 平成教員変遷 S.63~H.18』 (デジタルデータ)
- (3) 芸術学科西洋美術史研究室より『西洋美術史研究室紀要 Aspects of Problems in European Art History』既刊 18 冊(1997 ~)の寄贈を受けた。

3、資料活用実績

①問い合わせ件数 計54件

内訳(重複あり)

- ・資料有無問い合わせ52件
- ・閲覧室利用者 73人
- ·授業利用 2件(先端芸術科,日本美術史特講·演習)
- ・資料・画像掲載許可申請 10件(マスメディア 5、研究者 5[うち海外 1])
- · 資料閲覧 5件(研究者)
- ・情報提供 22 件(研究者 10[うち海外 1]、学内 5、個人[遺族]4、マスメディア 3[うち海外 2])

②所蔵資料活用の成果物

(敬称略/発表済みのものは発表順)

2021年7月	テレビ東京(著作:株式会社ネクサス)「開運!なんでも鑑定団」2021 年7月20日
2021年8月	テレビ熊本ほかフジテレビ系九州8局「ドキュメント九州 追憶の影~
	「無言館」命の声が聞こえる~」2021 年 8 月 23 日放送
2021年10	出口智之監修『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集 4 〈か―
月	こ〉編』文京区立森鷗外記念館
2021年10	後藤亮子 関西中国書画コレクション研究会設立 10 周年記念 国際シン
月	ポジウム「中国書画コレクションの時空」2021 年 10 月 16 日(土)・
	17日(日)
2021年12	HAB北陸朝日放送「デジタルミュージアム~清らなる工芸~」2021 年
月	12月18日 (土)
2021年12	浅井ふたば「大学史史料から見る「大浦食堂」の歴史―戦前・戦後の食
月	堂史を中心に」『杜』第 51 号
2022年2月	亀岡市文化資料館「亀岡の名宝展~円山応挙・狩野派・後水尾天皇所縁
	の品々~」2022 年 2 月 11 日(金・祝)-3 月 13 日(日)
	[VR (調査・確認のための画像提供)]
2022年3月	田代裕一朗「上野直昭資料から発見された高裕燮直筆原稿について―と
	くに京城考古談話会原稿を中心に―」『美術研究』436 号
	その他 5 件

③-1「GACMA 前室展示 | 2021 年 4 月 19 日 (月) -7 月 30 日 (金)

GACMA オープン記念展示

近現代美術史・大学史研究センターは、新型コロナウィルス感染拡大防止のためオンラインを中心に活動してきたが、令和3年4月より開室した。開室に合わせ、展示室において当センターが所蔵する大学史関連資料を展示し、東京美術学校第1回卒業証書をはじめとする大学史史料と、昨年2月に閉店した藝大名物食堂「大浦食堂」の食器類などを紹介した。

<展示資料>

- ①「従明治二十二年至同二十九年 東京美術学校年報 一 東京美術学校」
- ②「東京美術学校第1回卒業証書」岡本勝元(明治26年絵画科(日本画科)卒)
- ③「従明治二十二年至同二十九年 予備科入学関係書類 東京美術学校」
- ④講義ノート「津田教授 西洋工芸史」岸澤武雄(昭和13年工芸科鋳金部卒)
- ⑤工芸科課題「昭和22年 工芸科 感覚考査|
- ⑥ 東京美術学校校章入り食器 (カップ・ソーサー・湯のみ)
- ⑦ 大浦食堂食器 1式
- ⑧ 「自昭和十六年 土地ニ関スル書類 東京美術学校」

※すべて美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵

③-2「GACMA 前室展示」2024年10月11日(月)-12月27日(月)

[特集展示] 東京美術学校とスポーツ

東京美術学校では、明治後期から大正初期には、剣道、柔道、弓道、乗馬などの武道を 起源とするスポーツが部活動の中で開始されるようになる。大正後期、文部省によって体 育教育の改革が推進され、西洋式「スポーツ」が美校にも取り入れらた。文部省が実施し た「体育デー」に倣い、昭和元(1926)年に第1回陸上大運動会が開催したのをきっかけ に、昭和初期には、テニス、卓球、野球、バレーボール、水泳、スキーなど様々な西洋式 スポーツの部活動がさかんになった。

<展示資料>

- ①「自明治四十四年一月至大正十二年 文部省往復書類」
- ②「自大正六年至仝九年 庶務雑書類」
- ③「体育二関スル綴 教務掛」大正 11 年~14 年頃
- ④剣道大会の賞品として授与されたメダル
- メダル裏面の刻印「第十九回東京美術学校剣道大会 昭和五年十一月八日」
- ⑤剣道大会の賞品として授与されたメダル
- メダル裏面の刻印「第二十回東京美術学校剣道大会 昭和六年十一月」

⑥写真アルバム 撮影:昭和8年11月、第8回陸上大運動会

⑦写真アルバム 撮影:昭和9年11月、第9回陸上大運動会

※すべて美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵

[特集展示] 東京美術学校とスペイン風邪

新型コロナ感染症が蔓延して1年半、いぜん収束に至らない状況にちなみ、約100年前の大正時代に今日と同様に感染症の流行の最中にあった東京美術学校の様子をしのぶ資料を展示した。世界的に流行したいわゆる「スペイン風邪」は大正7年から断続的に3度の流行があり、その第2波に当たる大正9年1月には予防を呼びかける校内掲示が起案された。含嗽(うがい)・呼吸保護器(マスク)・予防接種を奨励するなど、現在の基本的な感染症対策と共通しており興味深い。またスペイン風以外にも感染症流行が相次いだ当時の様子を示す資料として、天然痘予防接種の校内実施に関する書類もあわせて展示した。

<展示資料>

- ①「自明治四十四年一月至大正十二年 文部省往復書類」
- ②「自大正六年至仝九年 庶務雑書類」
- ③予防宣伝ポスター(複写) 五枚のうち

※①、②は美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵 ※③は国立保健医療科学院所蔵 内務省衛生局編『流行性感冒』(1922)所収

③-3「GACMA 前室展示【臨時開室】 | 2022 年 1 月 28 日 (金), 31 日 (月)

[特集展示] 東京美術学校と卒業制作

卒業・修了制作展の日程に合わせた臨時開室で、東京美術学校における卒業式と卒業制作に関する資料を展示した。明治時代末の卒業式の準備から実施に至る諸資料、また卒業式にあわせて行われた「成績品陳列展」に関する資料などを展示し、現代に続く卒業式および卒業制作展の初期の様子を示した。卒業制作にあたり、各科・学生ごとに必要経費を支給することもかつて行われており、金額や支出の履歴を示す資料も展示した。「成績品」の現物は、現在本学大学美術館に所蔵され、貴重なコレクションが形成されている。

<展示資料>

- ①『自明治四十四年至大正三年 儀式関係書類 庶務掛』
- ②「東京美術学校生徒卒業製作材料補給内規 明治四十四年七月十五日」
- (『自明治四十四年一月至 年 月 教務内規諸規定書類 教務掛』所収)
- ③『卒業制作費差引簿 会計掛』4 冊(昭和二年度、同三年度、同五年度、同六年度)
- ④『自第一回至第 回 卒展出品目録 教務係』 (昭和 26 年~平成 2 年)
- ⑤「四十二年三月 生徒成績品展覧会陳列物 | 写真

※①、②は美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵 ※③は東京藝術大学大学美術館所蔵の写真資料(複写)

④報道・掲載

④-1『杜』

浅井ふたば「大学史史料から見る「大浦食堂」の歴史―戦前・戦後の食堂史を中心に」 『杜』第51号 (2021年12月20日発行)

4、年間活動

4-1 年間の活動

2021年4月

GACMA 閲覧室開室 (4/16, 月曜・金曜午後)

歴史資料等保有施設認定(前年度申請)

情報システム責任者(古田亮)新指名

閲覧室開室開始

2021年5月

第1回運営委員会(5/11)(リモート)

中村勝馬資料調查·整理開始

『百年史』PDF 整備・加工作業開始

特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドラインの 一部改正

web ページコンテンツ英訳作業・更新

文化財保存学日本画研究室保管映像資料調查

2021年6月

卒業生・在校生調査のための資料利用の打ち合わせ(杜の会)

東京美術学校在籍者データ入力

『百年史』掲載画像の所在調査

GACMA 内作業用画像ファイルサーバの設置

2021年7月

杜の会より東京美術学校在籍者に関する資料データ提供

東京美術学校在籍者データ入力

南米岳資料寄贈

『百年史』所収作品写真の著作権調査

GACMA 所蔵資料一覧の web 公開

2021年8月

『百年史』所収作品写真の著作権調査

東京美術学校在籍者データ入力

田中ジョン直人氏資料寄贈

(GACMA 閲覧室夏期閉室 [8,9月])

2021年9月

田中ジョン直人氏より資料受け入れ

東京美術学校在籍者データ入力・校正作業

清水泰博先生 GACMA 視察 (9/22)

南米岳資料整理

『百年史』データ整備

2021年10月

GACMA 閲覧室開室 (10/1)

東京美術学校在籍者データ入力・校正作業

大学美術館所蔵学史資料調査(デジタル閲覧)開始

GACMA 閲覧室パンフレット作成

先端芸術研究科授業閲覧(10/26)

南米岳資料整理

『百年史』データ整備

2021年11月

芸術学科開設授業閲覧(古田亮先生)

田中ジョン直人氏寄贈資料整理

東京美術学校在籍者データ入力・校正・データベース作成作業

大学美術館所蔵学史資料調査 (デジタル閲覧)

『百年史』データ整備

南米岳資料整理

第1回研究会準備

2021年12月

「東京美術学校在籍者一覧 | データベース公開

田中ジョン直人氏寄贈資料整理

大学美術館所蔵学史資料調査 (デジタル閲覧)

『百年史』公開用データ整備

前室展示

南米岳資料整理

第1回 GACMA 研究会開催 (12/21)

2022年1月

(GACMA 閲覧室冬期休室 [1-3月])

第2回近現代美術史・大学史研究センター運営委員会 (1/24)

臨時開室・展示 (1/28,30)

2022年2月

『年報・紀要』編集作業

芸術情報センター 芸術情報資源調査依頼受諾

2022年3月

令和 4 年度公開講座準備

『百年史』デジタルデータ web ページへ公開(『東京美術学校篇』第 2、3 巻) 『年報・紀要』編集作業・刊行

4-2 特記すべき事項

①歷史資料等保有施設認定

昨年度、所蔵資料の目録を作成するなどして準備を進めて申請した歴史資料等保有施設の認定について、内閣府大臣官房公文書管理課より本学総務課に官報公示の連絡があり、認定が確定した。

②運営委員会の開催

◇令和3年度 第1回運営委員会(5/11)(リモート)

昨年度の活動報告と今年度の活動計画、とくに(1)卒業生名簿のデータベース化、(2)大学 美術館資料との連携、(3)研究会開催について説明を行い、運営委員より活発なご意見をい ただいた。

(1)については現名簿(卒業生のみ)に未卒業生、非正規在籍者の情報を加えてデータ化し、当面は東京美術学校時代までの公開を目指すもの。(2)は学内に残る資料の把握・情報収集という業務の一環として、大学美術館所蔵資料と GACMA 資料との関連を調べ共有しようとするもの。(3)は GACMA 開設以来初めての試みとして、日頃の調査研究の成果発表の場を作る計画で、関連分野を専攻する学生などの参加も検討する。

上記に関連して、学内で進みつつある先端芸術研究科の黎明期の資料収集や、図書館所蔵 の岡田信一郎資料などについて、運営委員より情報提供をいただいた。

◇令和3年度 第2回運営委員会(1/24)(リモート)

第1回運営委員会で挙げた計画(1)~(3) の進捗、およびその他の GACMA の業務についての報告と、来年度への展望を議案とした。

運営委員からは、GACMA の業務を大学内にもっと周知し連携を深めることとあわせ、学外へのアピールを行い、社会の中での大学の価値をより高め広く周知できるようにとの提言をいただいた。

具体的な方策として音楽学部の大学史史料室と歩調を合わせて進めることや、動画や SNS を用いた情報発信のアイディアなどが話し合われた。

③授業閲覧

本年度は開設後初めて、美術学部の平常の授業内で GACMA の資料活用の事例があったので紹介する。

◇先端芸術研究科(担当教員:荒木夏実,藤井光「敬称略、以下同じ」)

美術家・映像作家の藤井光氏を招聘して行われたリサーチと作品制作の演習で、GACMAの書庫を見学し、所蔵資料のうち「森鴎外講義ノート」「三好二郎資料」等大学の歴史に関わる資料数件を閲覧した。その後各自閲覧体験から得られたインスピレーションに沿って作品を制作した。

◇「日本美術史特講・演習」(芸術学科開設授業、担当教員:古田亮)

リモート講義を教員が GACMA の室内外からライブ配信する形式で行われた。蓄積した文書や資料が整理、調査を経て生きて使える資料となり活用される様子を、GACMA の居室や実際の資料(寄贈を受けて整理中の「南米岳資料」等)を実地に見せながら解説した。

④「東京美術学校在籍者一覧」公開

東京藝術大学美術学部の前身である東京美術学校の在籍者について、氏名・入学年・卒業年をまとめた一覧。本年度6月頃からデータの入力作業を開始し、12月に明治期入学者分を完成、GACMA Webページ上に公開した(「東京美術学校在籍者一覧」

< https://gacma.geidai.ac.jp/contents/431-2/ >)

美校在籍者については既刊の卒業生名簿である『杜の会名簿』(ただし最後の刊行が平成16年度で終わっている)がある。東京美術学校から本学美術学部の卒業生の情報はこの発行元である杜の会よりご提供いただき、プライバシーに抵触しない範囲でデータベースに反映した。従来、在学した者はここに概ね網羅されているように考えられてきたが、今回『東京美術学校一覧』等の資料を使い年度ごとの入学、進学、転科等の記録を一覧することによって、従来すくいきれていなかった多くの在籍者の存在や、転科や飛び級といった個々の在学者の動きが浮かび上がってきた。詳細は浅井ふたばによる本年度研究会発表(次項目⑤および「研究会発表要旨」p.50)を参照されたい。

なおデータの入力・校正・監修はエクセルベースで行い、公開の体裁は PDF ファイルと している。フォーム等を用いた検索機能はないが、環境を選ばない簡便な情報へのアクセ スが可能である。

本一覧は来年度も引き続き、大正期、昭和期と順次公開される予定である。

⑤第1回研究会(12月21日)

GACMAの所蔵資料や大学史に関する調査研究の発表の場として、第1回研究会が以下のように開催された。

日時:2021年12月21日(火)18:00-19:30(対面+リモート)

プログラム:

18:00-18:10 ご挨拶 古田亮(近現代美術史・大学史研究センター長)

18:10-18:40 発表①

「東京美術学校在籍者一覧 一作成意義と活用にむけて一」

浅井ふたば(近現代美術史・大学史研究センター学術インストラクター)

18:40~19:10 発表②

「記録と証言による東京芸術大学取手校地史の構築の試み ―継承のかたちを求めて―」 田中ジョン直人(大学院国際芸術創造研究科特任助手)

19:10~19:30 自由討論

関係者を中心に告知を行うクローズドの体制であったが、来室とリモート合わせて 20 数名の参加があった。

発表①では GACMA の資料整理と研究の成果である「東京美術学校在籍者一覧」(前 頁参照)の、データ蓄積から公開までの工程とデータ活用の意義と展望について報告され た。発表②は昨年度本学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻に提出され た終了論文のために収集され、今年度 GACMA に寄贈された本学取手校地に関する資料 (p.9) とその歴史的重要性についての報告であった。いずれも本報告書 (p.51,53) に発 表要旨を掲載している。

本研究会は来年度以降も継続して行う予定である。

⑥展示

今年度は GACMA 前室にて大きく分けて 3 度テーマ展示を行なった。詳細は本報告書「3、資料活用実績 ③展示」(pp.11-14)参照。

⑦美術学部内大学史資料調査 (大学美術館の写真資料調査)

学内に現存する大学史資料の所在、数量、保管状況、GACMA 資料との関連等を洗い出し、各部署間の情報共有を目標に、まずは大学美術館のデータベースと GACMA 資料との照合作業を開始した。作業は写真資料を中心に進めた。その理由は

(1)学内外から資料閲覧や使用許可の打診を日常業務として受けており、対応の効率化のために問い合わせ頻度の高い『百年史』掲載写真の原板の所在の確認が必要である。

- (2)(1)の作業は前年度に附属図書館の所蔵写真との対照が終わり、美術館の資料の確認が次の課題となる。
- (3)大学美術館内でのデジタルデータ閲覧の体制が整い、申請すれば精細のデジタル閲覧が可能である。

といった事情による。

写真の照合には時間を要し、今年度は『百年史』第1巻の終盤で終了した。来年度以降にも継続し、使用頻度の高いものや重要資料については、検索語の工夫やID番号との対応表などを共有して部署間でスムーズに資料の指定が行えるようにするのが目標である。

なお作業中に思いがけず GACMA 所蔵の文献資料と関連する写真資料が見出された。 学内の異なる場所に分置保管される資料がデータベースの駆使によって関連づけられる好 例と思われるので、その一例を「研究報告」(p.28)に紹介した。

⑧『百年史』デジタルデータの公開

『東京芸術大学百年史』のデジタルデータ化の作業は昨年度「東京美術学校篇」第1巻をWebページ上に公開し、その後継続して作業を進めてきたが、同第2巻、第3巻の公開が成った。

「東京芸術大学百年史 東京美術学校篇」<https://gacma.geidai.ac.jp/y100/>

- 第1巻<https://gacma.geidai.ac.jp/y100/#vol1>
- 第2巻<https://gacma.geidai.ac.jp/y100/#vol2>
- 第3巻<https://gacma.geidai.ac.jp/y100/#vol3>

既刊の『百年史』の目次をベースに、章ごとに分割した PDF ファイルにリンクする形式は3巻とも共通である。

今年度公開分の第2巻、第3巻(明治32年以降から戦後の美術学校閉校まで)は扱う時代が新しくなるにともない、著作権保護期間内にある作品の図版写真のスミ消し処理が新たに加わっている。今後著作権処理の完了したもの、または保護期間を満了しパブリックドメインとなったものからスミ消しをはずし公開していく予定である。

⑨年報・紀要の編集・発行

GACMA の活動報告、所蔵資料の概要と使用状況、資料紹介、活動報告などを掲載 し、年に一度刊行。次年度以降さらに内容を拡充する。

5、資料紹介・研究報告

明治期の東京美術学校 一教育課程と修学状況を中心に一

浅井ふたば(近現代美術史・大学史研究センター 学術インストラクター)

はじめに

当センターでは本年度、東京美術学校(以下、「美校」)に在籍した生徒が一覧で分かる「東京美術学校在籍者一覧」の作成を開始し、2022年3月現在、当センターWebページ(https://gacma.geidai.ac.jp/contents/431-2/)で明治期入学者の情報を公開している。「東京美術学校在籍者一覧」の作成過程で生徒の情報を蓄積したことで、美校の生徒の修学状況を把握することが可能になった。よって本稿では、明治期東京美術学校の教育課程について規則等「を中心に解説するとともに各課程・科の修学状況について確認する。

1.正規の教育課程

【規則等】

明治 22 年(1889)の開校当時、美校は予備教育課程を終えてから専門課程に進む二段階の教育課程を編成した。岡倉天心の構想であったという予備教育は²、開校時は「普通科」、明治 25 年(1892)以降は「予備の課程」、明治 38 年(1905)以降は「予備科」において実施された。予備教育に続く専門教育は、開校時は「専修科」、明治 25 年(1892)以降は「本科」において実施された³。修学年限は予備教育と専門教育の期間を合わせて5 年であった⁴。

1 規則は、当該年の『東京美術学校一覧』に記載されている「東京美術学校規則」を参照した

^{2 『}東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第二巻、芸術研究振興財団©・東京芸術大学百年 史刊行委員会、1992 年、29 頁。

³ 本科に設置された学科は、美校開校時は絵画科(日本画科)、彫刻科、美術工芸科、彫刻科 の3科であった。その後明治29年(1896)、絵画科内に西洋画科が置かれ、図案科が新設され た。彫刻科は開校時、木彫分野のみが置かれていたが塑造、牙彫の分野が加わった。美術工芸 科は開校時、金工及び漆工分野が置かれていたが、金工分野を彫金、鋳金及び鍛金に細分化し て科を増設した。

⁴ 開校から明治 24 年(1891)までは予備教育期間が 2 年で専門教育期間が 3 年、明治 25 年(1892)から明治 33 年(1900)までは前者が 1 年で後者が 4 年、明治 34 年以降は前者が 1 学期間(約 3 か月)で後者が 4 年と 2・3 学期間(約 9 か月)であった。

美校への入学を志望する者は、入学試験を受ける必要があった。明治期の美校の入学試験は一般入試と推薦入試があり、満 16歳以上 25歳以下の者に受験資格が与えられた(明治 28年、満 17歳以上 26歳以下に変更)。

一般入試には学科試験と実技試験の二種があり、美校において実施された。明治 23 年(1890)の学科試験では読書及び作文、算術、地理、日本歴史の 4 科目、実技試験では臨画又は彫刻模造、新画又は彫刻の 2 科目合わせて 6 科目の試験が行われた。しかしこの 2 年後に「入学在学及退学規程」が改正されると、道府県立尋常中学校の卒業生に対しては学科試験を実施しなかった。また明治 27 年(1894)、美校が適当と認めた公私立技芸学校の卒業生若干名は、学科試験も実技試験も受けずに入学できることが規程に記載された。明治 34 年(1901)にも規則改正が行われ、公私立中学の卒業生は、出身校長の証明があれば実質的に無試験で「仮入学」できることとなった。「仮入学」した生徒は、美校で数か月間毛筆画と木炭画を習んだ後に志望科の試験を受け、合格した者が「予備の課程」に入ることができた。この 4 年後の明治 38 年(1905)以降は、規程に記載された条件5を満たしていれば誰でも「予備科」に入学できた。入学志望者が募集人員を超過した時のみ、選抜試験が実施された。本科への入学資格は予備科を修了することが条件で、予備科の修業期間は 1 学期間(約 3 か月)であった。

推薦入試は、道庁府県によって推薦された人物を対象とした試験である。試験内容は一般入試と同様であったが、学科試験は各道庁府県において合否を判断し、実技試験は美校において受験者から送付された製作物で合否を判断した。明治 29 年(1896)以降、推薦入試の対象者は美校が適当と認める公私立技芸学校の推薦者に変更となり、出身校長の証明があれば能力に応じて「予備の課程」あるいは「本科」に入ること可能が許された。なお推薦試験は明治 38 年(1905)に廃止された。

所定の教育課程を終えて試験に合格した者は、美校から卒業証書が授与された。このうち学業品行が優秀な生徒については賞状が与えられた。明治38年(1905)以降は、卒業製作の作品を完成させて卒業が認められた者に卒業証書が授与され、成績優秀者には賞状と賞品が与えられた。さらに「特待生」に選ばれると、一年間の授業料が免除された。

【修学状况】

明治期における美校の正規入学者は 1286 人で、このうちの 934 人が卒業した。「東京美術学校在籍者一覧」で「入学年月」「卒業年」の列を見ると、入学時期は同じでも卒業時期にばらつきが生じていたことが確認できる。標準修学年限は 5 年であるのに対し、生徒の在籍期間は最短で 3 年、最長で 8 年と様々であった。このように、明治期の美校では生徒の能力にフレキシブルに対応していたという事実を把握できたことが、「東京美術学校在籍者一覧」作成における大きな成果であった。

5 「東京美術学校校則(明治 38 年 3 月改正) 第 4 章入学在学及退学規程 第 10 条」。

開校当初は、飛び級などの特例的な対応がみられた。例えば美校が開校した明治 22 年 (1889) 2 月、予備教育課程である普通科を越えて専修科に入学した生徒には、藤岡注多良(六角紫水、美術工芸科)、塩沢峰吉(大村西崖、彫刻科)、横山秀麿(横山大観、絵画科)ら 12 人がいた。彼らは専修科第 1 年から第 2 年に進級した後で第 4 年に飛び級し、明治 26 年 (1893) 7 月、在籍期間 3 年で卒業した。修業年限よりも早く卒業した生徒は、明治 30 年代までに多く確認できる。

飛び級の生徒がいた一方で、正規入学者 1283 人のうち 349 人が美校を卒業しておらず、およそ 3 人に一人が中途退学した6。また、卒業したものの留年した生徒は 210 人いた。進級の条件は、「試業及証書規程」に記載されている。これによれば、開校当初の美校では学年の終わりに進級試験が実施された。進級試験の得点と平常課題の成績を 2 倍にした得点を用いて7平均点が 60 点以上あれば及第した。ただし、実技科目の成績が 60 点に満たないもの、実技以外の科目の成績が 40 点に満たないものが一つでもあった場合は進級できなかった。明治 38 年(1905)以降は、進級試験を実施しない代わりに学

[下]明治22年2月に専修科に入学した岡本勝元の卒業証書(GACMA所蔵)



期ごとに試験が課せられた。このように美校の生徒は、実技実習だけでなく学科のテスト 勉強にも時間を費やすことを求められており、進級は容易なことではなかったと考えられ る。

2. 教員養成課程

【規則等】

美校に教員養成課程である図画師範科が設置されたのは明治 40 年(1907)であるが、それ以前の開校当初から図画教員の養成が始まっていた。図画教員志望者に対して「特別の課程」が設置され、普通科を修了後、教職科目を 1 年間履修すれば教員資格を取得することができた。しかしながら「特別の課程」は設置から 2 年後の明治 25 年(1892)に廃止されたため、その後は通常の履修科目に加え、「用器画法」「教育学」等の科目を 1 年

⁶ 中途退学者には病気や経済的理由、兵役などで辞めざるを得ない生徒も多くいたと考えられる。

⁷ 明治 25 年以降は、進級試験の得点と平常課題の成績を 2 倍にして合わせた得点を「3」で割ったもの(「東京美術学校校則 試業及証書規程 第 21 条」)、明治 38 年以降は、1~3 学期の得点を平均したもの(「東京美術学校校則 第 7 章試験規程 第 33 条」)を判定に用いた。

間履修することで教員資格が得られた⁸。開校当初、教職科目の受講対象者は絵画科(日本画科)の生徒のみだったが、明治 29 年(1896)に図案科、明治 38 年(1905)に西洋画科の生徒が加えられた。

また一方で、道庁府県立学校の図画教員を対象とした図画講習科が明治 25 年(1892)に設置された。図画講習科は、「図画講習科規程」に基づいて図画技法や図画に関する教育を改めて学ぶことを目的とした科であり、道庁府県の推薦があれば無試験で入学することができた。在学期限は 2 年で授業料は徴収されなかった。

明治40年(1907)、「文部省令第18号(明治40年6月5日発布)」により教員養成の専門教育を行う図画師範科が設置された。「図画師範科規程」によれば、入学資格は満24歳以下の男子で、道庁府県師範学校卒業生、官公立私立中学校卒業生及び専門学校入学者検定規程に基づく検定の受験者に与えられた。入学試験には地方長官による推薦入試と



[上]図画師範科第一期生・第二期生と教員(GACMA 所蔵)

一般入試があり、推薦入試の合格 者は入学手数料が免除された。図 画師範科の修学年限は3年で、こ の期間中、図画師範科生に学資と して毎月6円が支給された。また 図画師範科の設置とともに明治40 年(1907)に制定された「東京美 術学校図画師範科卒業者服務規則 」には、卒業生は卒業証書を受領 した日から5年間図画に関する教 職に従事することが記載された。

【修学状況】

美校が開校した明治22年(1889)2月、「特別の課程」に竹内次郎、廣川栄三郎、山崎競の3人が入学した。特別の課程は基本的には普通科を修了した後に進級することになっていたため、図画教員の養成を急ぐための特例措置といえるだろう。この3人は「特別の課程」に2年6か月在籍した後、美校卒業生の中で最も早い明治24年(1891)7月に卒業した。竹内と廣川は卒業後すぐに「私立美術講習所」、「愛媛県尋常師範学校」の教員になり、山崎は卒業翌年に「群馬県桐生町公立山田第一高等小学校」の教員となった。同様に、明治期に「特別の課程」を卒業した27人のうち25人が教員となった。

図画講習科の設置から廃止までの明治 25 年(1892)から明治 39 年(1906)の期間、18 名が在籍し 12 名が卒業した。生徒となった図画教員は全国から集まり、その内訳は岡

⁸ 明治38年以降は、教職科目に木炭画・鉛筆画・水彩画及び毛筆画が追加された(「東京美術学校校則 第7章試験規程 第33条」)。

山・山形から各3人、福岡・奈良・宮城から各2人、大分・大阪・岐阜・長野・山梨から各1人であった。

図画師範科には94人が在籍し、このうち88人が卒業した。図画師範科の生徒は9割以上が卒業しており、中退者が極めて少ないことが他科と大きく異なる点であるといえるだろう。図画師範科の生徒は全国各地から入学したが、特に入学者が多かったのは長野(9人)、大分・熊本(各6人)、山口・茨城(各5人)であった。

これらの教員養成課程を卒業した生徒は全国各地の図画教員となり、近代日本の美術教育を支える重要な役割を果たしたと考えられる。

3. 選科

【規則等】

選科は、「選科規程」に基づき、本科に置かれた実技科目の履修を希望する満 18 歳以上の者に対して設置された。担当教員の許可があれば無試験で入学することができ、予備教育期間なしで本科生と同じ実技授業を 1 科目から受けることが可能であった。ただし、授業料は本科生と同額が徴収された。明治 38 年(1905)の規程改正後、入学資格は満 17歳以上 26歳未満の男子に変更され、入学試験が実施されるようになった。なお選科に修業年限は設けられず、試験に合格した者に証書が授与された。

【修学状况】

明治期における選科の入学者は 490 人で、そのうち 320 人が卒業した。選科は本科生に欠員が生じた場合に生徒を受け入たため、入学年や科ごとに人数のばらつきがあった。明治 24 年(1891)に最初の選科生 10 人が入学して以降、入学者が全くいない年もあれば、50 人以上が入学した年もあった。明治 30 年代後半には選科の入りやすさゆえに入学競争が激しくなり、科によっては入学試験を実施した。入試倍率が特に高かったのは日本画選科と西洋画選科であった。例えば明治 38 年(1905)の倍率は日本画選科の志願者 23 人に対して合格者 5 人の 4.6 倍、西洋画選科の志願者 23 人に対して合格者 8 人の 2.9 倍であり、明治 39 年(1906)は日本画選科の受験者 24 人に対して合格者 7 人の 3.4 倍、西洋画選科の受験者 30 人に対して合格者 7 人の 4.3 倍だった9。

選科の特徴は、まず、外国人生徒及び女子生徒を受け入れたことである。明治期を通して 22 人の外国人生徒が入学したが、そのうちの 4 人は女子生徒であった。明治 30 年代まではドイツ(明治 29 年彫金選科入学)、イギリス(女子、明治 33 年西洋画科選科入学)、アメリカ(3 人ともに女子、明治 34 年・明治 37 年・明治 42 年西洋画科選科入学)、シャム(明治 38 年金工選科入学、明治 38 年漆工選科入学)、インド(明治 38 年漆工選科

9 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第二巻、芸術研究振興財団©・東京芸術大学百年 史刊行委員会、1992 年、837 頁。 入学、明治39年西洋画科選科入学)など欧米を中心とした留学生が見られたが、明治40年代以降は東アジアを中心に中国・韓国・台湾からの留学生が主流となった。選科の外国人生徒22人中13人が卒業したが、この中には女子生徒であるアメリカ人のマリー・イーストレーキ(明治40年選科卒業、その後3年間研究科に在籍)が含まれる。

次の特徴としては、在籍期間が短い生徒が多かったことである。選科生に修業年限はなかったが本科生の修業年限と同じ4年(明治38年以降は5年)を目安に卒業する生徒が多かった中で、明治30年(1897)に西洋画科選科に入学した北蓮蔵は最短の1年で卒業した。北は入学してすぐに第4年に在籍し、1年間で選科を卒業した後、研究科に進学した。次に短い2年で卒業した生徒は19人いた。このうちの16人が西洋画科選科の生徒であり、小林萬吾、白瀧幾之助、湯浅一郎(3人ともに明治29年入学)など洋画団体「白馬会」の関係者が多かった。明治29年(1896)の西洋画科新設に合わせ、白馬会の中心人物であり西洋画科の初代教授でもある黒田清輝が有能な人材を集めていた様子がうかがえる。

4. 研究科

【規則等】

研究科は、「研究科規程」に基づき、美校を卒業した後もさらに研究を続けたい者に対して設置された科である。卒業生のうち、教員が認めた者は研究科に進学することができた。在学期限は2年で(明治26年に3年に変更)、授業料の徴収はなく、研究のための旅費が支給された。明治38年(1905)になると、規則改正によって研究科の入学資格及び進級基準が見直された。本科の卒業試験で80点以上を取得した者は無試験で研究科に入学できたが、80点に満たない者に対しては入学試験が実施され、この試験で80点以上を取得した者が合格した。また入学資格は満22歳以上満28歳以下という条件が加えられた。さらに学期ごとに1回以上の試験が実施されることとなり、1年間の成績が平均70点を下回る生徒は研究生の資格を失い、また成績が70点以上80点未満の生徒は進級の段階で試験が課せられた。成績が80点以上の生徒は次学年に進級することができ、90点以上の成績優秀者は製作費と研究のための旅費が支給された。なお研究科を修了した者には証書が授与された。

【修学状況】

明治期に美校に入学した全生徒 1889 人中 1359 人が卒業したが、卒業生のうち 365 人が研究科に進んだ。進学率は 27%であった。明治 38 年 (1905) の規則改正までは全ての研究生に対して研究のための旅費が支給されたことから、研究生は教員の助手のような働きをしていたと考えられる。研究科に在籍した天草友雄 (明治 29 年日本画研究科入学)

、香取秀真(明治32年塑造・鋳金研究科入学)、津田信夫(明治33年鋳金研究科入学)を含む17人¹⁰の生徒は、後に美校の教員となって近代日本の美術教育に大きく貢献した。

おわりに

以上、明治期の東京美術学校の教育課程及び修学状況について確認し、東京美術学校の実態の一端を明らにすることができた。明治期に美校に入学した生徒の一部は美校の教員や図画教員となって近代美術の発展に貢献していたことが確認できたが、その他の卒業生も何らかの形で美術に関わっていたと考えられる。今後は卒業生の進路について調査し、美校が近代美術に果たした役割について考えたい。

_

¹⁰ 後に美校の教員になったのは天草、香取、津田に加えて西郷規(明治 27 年日本画研究科入学)、桜岡三四郎(明治 27 年鋳金研究科入学)、石井吉次郎(明治 30 年蒔絵研究科入学)、清水亀蔵(明治 29 年鋳金研究科入学)、岡田秀(明治 31 年日本画研究科入学)、長愛之(明治 33 年彫刻研究科入学)、鶴田機水(明治 34 年日本画研究科入学)、小場恒吉(明治 37 年図案研究科入学)、畑正吉(明治 39 年彫刻研究科入学)、平田栄二(明治 42 年日本画研究科入学)、朝倉文夫(明治 40 年彫刻研究科入学)、石井鶴三(明治 43 年彫刻研究科入学)、今和次郎(大正元年図案研究科入学)、広川松五郎(大正 2 年図案研究科入学)である。

明治期の卒業式と生徒成績品展覧会

芹生春菜(近現代美術史・大学史研究センター 学術インストラクター)

はじめに

美術学部近現代美術史・大学史研究センター(GACMA)では、令和3年度の冬期閉室期間中、卒業・修了制作展にあわせて1月28日、31日の2日間のみ臨時開室を実施し、卒業式・卒業制作に関する資料を展示した。その概要と展示資料のリストは資料活用実績の「展示」の頁(pp.11-12)に示した通りであるが、準備の過程で本学大学美術館が所蔵する古写真の中に本展示に関わる重要な資料を見出したので、本稿で紹介したい。

まず臨時開室で展示した資料についてあらためて概観する。

①『自明治四十四年至大正三年 儀式関係書類 庶務掛』

校内で執り行われる儀式についての文書を綴った簿冊で、毎年の卒業式および生徒成績 品展覧会に関する文書を含む。この中で最も古くは明治44年の卒業式に関するもので、 通知や案内状の文案、式次第、参列者名簿、卒業生氏名一覧、式当日の食品提供の見積 書、展覧に関する規定、展覧会当日の教員の当番表から片付けまで多岐にわたる。

②『自明治四十四年一月至 年 月 教務内規諸規定書類 教務掛』所収「東京美術学校生徒卒業製作材料補給内規 明治四十四年七月十五日」

卒業制作にかかる材料費を美校から支給したことを示す文書で、日本画・西洋画・図案は一人につき 15 円、塑造・木彫・牙彫は 25 円、鋳造は 35 円、金工は 45 円、漆工は 75 円以内と記される。さらに材料は教官が保管し残余は返納すること、材料の一部を個人で負担する場合も作品は学校の所有となること、図画師範科生徒には 7 円以内が支給されることなどもあわせて規定されている1。

- ③『卒業制作費差引簿 会計掛』4冊(昭和二年度、同三年度、同五年度、同六年度) 昭和期の卒業制作費支給に関する文書で、生徒氏名と材料購入の使用金額・残余金額を 逐一記録しており、材料費支給を具体的に裏付ける貴重な資料である。
- ④『自第一回至第 回 卒展出品目録 教務係』(昭和 26 年~平成 2 年) 戦後の出品目録を綴じたもの。卒業制作展が現在の本学に継続する重要行事であることを 示す。

_

¹『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第 2 巻』(ぎょうせい、1992)pp.497-498 に掲載。なお塑造部の卒業制作については明治 44 年 4 月 29 日付の「塑造部卒業製作競技法変更ノ件ニ付上申」に卒業制作の規定が改正され、生徒ごとではなく全体で 1 人または 2 人のモデルを使い同一の方法で競技的制作をさせることが規定された。これにより 1 人ずつ 25 円支給した制作費に多大な余裕を生じるので、この余裕を以て卒業期或いは 4 年生等の平常成績品を制作し成績品展覧会出品の準備をなすよう促しており、塑像科の制作費は当初モデル料にも充てられたことがわかる。

明治 44 年卒業式と成績品陳列展

明治 44 年の卒業式は同年 3 月 29 日に挙行された。上記①簿冊に所収の「第二十回卒 業證書授與式次第・卒業生姓名及卒業製作目録」【図 1】には、出席者参集、学校長式 辞、卒業賞与、学校長告辞、文部大臣訓辞、卒業生代表総代答辞、食堂での会食と各科卒

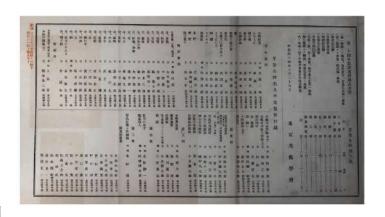
業製作品展の随意観覧を定めた 式次第、あわせて卒業生氏名と 卒業制作の一覧を載せる。

また同所収の「成績品陳列展 覧ニ関スル規定」には、詳細が 以下のように規定される。

成績品陳列展覧ニ関スル規定

一、成績品陳列室割

卒業製作ヲ陳列スベキ教室ハ別 図ノ通リ定ム(図面ハ庶務係ニア リ)



【図1】第二十回卒業證書授與式次第・

卒業生姓名及卒業製作目録

二、仝 陳列日割

陳列ハ三月廿五日(土曜)及廿七日(月曜)両日(各午前九時ヨリ始ム)トシ各科当該教室 ニ於テ其日ノ何レカヲ撰ビ陳列ヲ了スベキモノトス

三、陳列ニ要スル器品其他ノ請求

陳列ニ要スル幕ノ間数其他所要ノ器品、大工、人足等ハ三月廿四日(金曜)迄ニ当該科教官 ヨリ会計掛へ請求書ヲ差出スベシ 四、付札

付札ノ用紙ハ各科当該教官ヨリ庶務掛ニ請求シ各其科ニ於テ陳列品ニ貼付スベシ 五、展覧日時

卒業製作ハ卒用証書授与式後即三月廿九日午後(一時ヨリ四時マデ)及翌三十日(九時ヨリ四時マデ)観覧ヲ許スベキニ付本校職員、新旧卒業生ノ家族若クハ知己□□□□美術上関係アルモノハ紹介状(名刺ニ観覧セシメタキ者ヲ記スモ妨ゲナシ)持参ノモノニ限リ観覧ヲ許スベシ

六、説明及監督

来ル廿九日ノ午前ハ卒業証書授与式招待者ノ来観アリ其午後及翌三十日ハ前項ノ観覧者アル ヲ以テ各科当該教官ハ予メ出勤日割ヲ協定シ当日各陳列室ニアリテ其作品ノ説明監督ノ任ニ当 ルベシ

但出勤日割ハ三月廿七日中ニ各科主任ヨリ書面ノテ校長へ申出ヅベシ 七、跡片付

跡片付ハ三月卅一日(午前九時ヨリ始ムルコト)トシ之ニ要スル人足等ハ廿九日迄ニ会計掛 へ請求スベシ

八、成績品引継

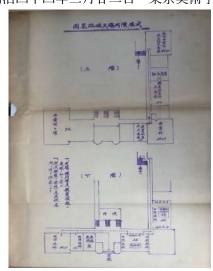
卒業製作ハ跡片付ノ日ニ於テ各科教官ヨリ文庫掛へ引継グベシ 九、復旧

陳列ニ要ヒシ教室ハ跡片付終了後直ニ之ガ復旧ヲナスベシ

明治四十四年三月廿二日 東京美術学校

ここには展示の室割りから展示日程、陳列の備品 や作業員等の補助、付札(キャプション)の用紙、 展覧の日時および招待者の扱い、各科教員による展 示会場での説明監督、片付け・復旧の期限、さらに 展覧会後に作品を文庫に納入したことなど、現在の 修了・卒業制作展に通じる様々な規定が読み取れ る。

この規定に付属の「式場陳列場及順路略図」【図 2】には、卒業式式場、休憩所、展示場(階下に日本 画科2室、西洋画科2室、階上に図案科1室)の位 置が示される。『校友会月報』に「本校第二十回卒業 証書授与式は(…)昨年新築の工藝部校舎に於て挙行せ られたり。式場は圖案科教室中の広間を以て之に充



【図2】式場陳列場及順路略図

て、(…)而して当日は階下の四室と階上の一室とに各科の卒業製作を陳列し²」とある内容 と合致し、この平面図が新築の工藝部校舎であることも判明する。

この年の1月25日、美校で大規模な火災があった。同年3月4日付文書には、「尚本年ハ火災後ノ復旧事務多端ナルト校舎ノ狭隘ナルトニ依リ例年ノ如キ生徒成績品展覧会ハ之ヲ見合セ唯卒業製作品ヲ一部教室ニ陳列シテ」云々とあり³、火災の影響により例年の生徒成績品展覧会は見合わせ、規模を縮小して卒業製作品のみを展示したという。したがってこの年の成績品展覧会では卒業制作のみが展示されたのであり、これは火災直後という事情によるイレギュラーな措置であったことがわかる。

卒業式と卒業制作展示の歴史

東京美術学校の第 1 回卒業式は明治 26 年(1893)7 月に行われ、明治 22 年 2 月の第 1 期入学生のうち正規の課程を修了した者 16 名が卒業証書を授与された 4 。

² 「第二十回卒業式」『校友会月報』第9巻第6号(明治44年4月30日発行)、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第2巻』(ぎょうせい、1992)pp.483-485

³ 『自明治四十四年至大正三年 儀式関係書類 庶務掛』所収の文書「当校本年ニ於ケル生徒卒業式挙行ノ日時ヲ本月二十九日午前十時ト相定メ候間此段豫メ及御通知候成/尚本年ハ火災後ノ復旧事務多端ナルト校舎ノ狭隘ナルトニ依リ例年ノ如キ生徒成績品展覧会ハ之ヲ見合セ唯卒業製作品ヲ一部教室ニ陳列シテ式当日午後及翌三十日ノ二日間学校関係者、卒業生父兄等に観覧セシムへキ見込ニ有之候間右ニ御含ミ相成度申添候成/明治四十四年三月四日 東京美術学校」。

^{4 『}百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』pp.226,232

卒業制作は開校翌年の明治23年に教育課程に取り入れられ⁵、第1期入学生にも適用されたので、課程の最終年度には全員が取り組むことになった。その際には制作費が支給され、卒業生全員の作品を学校に残すことも規定された。全生徒の作品の受け入れは大正3年に収容能力の限界を超えたため廃止されるまで続き、以後は選択された作品のみを残すことになった⁶。

所定の教育課程を終えて卒業試験に合格した者には卒業証書が授与されたが、明治 38 年以降は卒業制作を終えて卒業が認められた者に卒業証書が授与されるようになり⁷、卒業 の条件としての卒業制作の重要性は増したと思われる。

開校から本科の通常課程の5年を経た明治27 (1984) になると「授業成績物展覧会」が開催され、5年の教育の成果が大々的に展示された。卒業制作の展示はこれを嚆矢として毎年行われるようになる。この時の会期は4月10日から向こう1週間、会場は「日常の教場」を以てこれに充てたという。会場割り当ての詳細によれば、東方の本館階下南方第1室を鋳金・彫金・蒔絵の3科、同南方第2室を彫刻科、本館階下第1室・第2室を絵画科の展示室とし、いずれの科でも卒業製作品のほかに教官作品、授業成績物が展示された。その他の教室にも古画や工芸品の参考品、泰西諸国美術家の作品の展示室が設けられ、本館全体で絵画330点、彫刻468点、彫金113点、鋳金51点、蒔絵233点、合計1214点が陳列された。さらに西方の新館を校友会臨時大会の展掲場とし、合計258点の展示と褒賞授与式があった。校庭では楠公銅像木型の展示も行われて好評を博し、『國民新聞』『毎日新聞』『小日本』などに展覧会評が掲載された8。なおこの年の卒業式はこれより2ヶ月早い2月5日に行われており9、この点も卒業式当日に展覧のあった明治44年とは異なっている。

明治 28 年から同 29 年、30 年にかけては生徒成績物(一部教官作品も含む)が天覧に供され、多数の作品の宮中御買い上げがあった¹⁰。また明治 32 年 4 月 13 日から 19 日まで美校の新館で行われた生徒成績品展覧会は、各科生徒と教官作品、および明治 29 年以降の卒業製作中の優秀なものを展示し、あわせて優秀者への賞状授与式が行われたが、会期中 1 万 2230 人もの来館者を集め、さらに閉会後には優秀作品が宮中に送られ天覧の栄誉

5 「東京美術学校第二年報 明治廿三年分」『百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』pp.154-167

⁷ 浅井ふたば「明治期の東京美術学校 —教育課程と修学状況を中心に—」本紀要・年報 p.20。

¹⁰ 「解説 5 生徒成績物御買上げ」『百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』pp.298-300、「卒業制作品の御買上」『錦巷雑綴』第 9 巻(明治 31 年 2 月)。

30

^{6 「}解説 3 卒業制作」『百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』p.168。

⁸ 「解説 1 生徒成績物展覧会・校友会臨時大会」『百年史 東京美術学校篇 第 1 巻』 pp.243-247、「授業成績物展覧会及校友会臨時大会」『錦巷雑綴』第 2 巻(同年 6 月 15 日発 行)。

^{9 『}百年史 東京美術学校篇 第1巻』p.238。

に浴したという¹¹。このように生徒成績物の展示や催事は学内行事にとどまらず、世間的な注目度の高い行事であったことが伺われる。

成績品展示が卒業式当日開催となるのは『百年史』で確認する範囲では明治 34 年以降である¹²。GACMA 所蔵文書ではこの年代に遡る資料の現存は確かめられないが、卒業証書授与式にあわせて参加者や関係者が卒業製作・生徒成績作品を観覧するという形式は明治 30 年代に恒例化していったとみられる。なおこの頃卒業式は毎年7月に行われていたが、明治 39 年より前年の規則改定によって学期を3月終わりと統一して毎年4月初めに行うようになり¹³、以後成績品展覧会も卒業式に時期を合わせて春期に行われることが多くなった。

明治 42 年の生徒成績品展覧会

上述のように GACMA 所蔵の文書中には明治 44 年の火災を遡る関連資料の原本は確認されないが、本学大学美術館所蔵の古写真の中に、火災より古い明治 42 年の成績品展覧会の展示風景を写した写真があることがわかった。大学美術館の所蔵資料の高精細デジタル画像閲覧サービスを利用し、画像を詳細に熟覧することができた。写真は以下の 10 カットである。

四十二年三月 生徒成績品展覧会陳列物 (物品番号:写真 514[旧番号 495]) 【図 3】

[データベース掲載 URN - 写真裏面鉛筆書きメモ(デジタルデータで確認)]

- ①PP0146-016 西洋画平常成績 四十二年三月展覧会
- ②PP0146-017 漆工科 四十二年三月展覧会
- ③PP0146-018 日本画卒業製作 四十二年三月展覧会
- ④PP0146-019 師範科 四十二年三月展覧会
- ⑤PP0146-020 鋳造科 四十二年三月展覧会
- ⑥PP0146-021 金工科 四十二年三月展覧会
- ⑦PP0146-022 日本画平常成績 四十二年三月展覧会
- ⑧PP0146-023 日本画参考品 四十二年三月展覧会
- ⑨PP0146-024 彫刻科 四十二年三月展覧会
- ⑩PP0146-025 図案科平常成績 四十二年三月展覧会

10枚とも明治42年3月の生徒成績品展覧会を各科展示室ごとに写したもので、卒業製作と平常成績と参考品が同時に展示された火災以前の状況がわかる。この年の卒業式およ

^{11 「}関連事項⑥生徒成績品展覧会」『百年史 東京美術学校篇 第2巻』pp.53-62。

^{12 「}解説 3 本年度内卒業」『百年史 東京美術学校篇 第 2 巻』p.113

^{13 「}東京美術学校近事 本年本校の卒業式」『校友会月報』第4巻第7号(明治39年3月31日)、『百年史 東京美術学校篇 第2巻』p.336

び成績品展覧会については『校友会月報』に「第十八回卒業証書授与式」「成績品展覧会」と題した詳報があり¹⁴、それによれば卒業式は同年3月27日構内会議室にて行われ、式当日の午後には招待者、翌28日から30日の3日間は入場券を所持する一般人士に成績品展覧会を縦覧せしめたという。各科の配置は図按科、漆工科、彫刻科、日本画科、金工科、西洋画科、鋳造科、師範科の順序で、成績品に参考品等も交えた展示であること、作品売約は行わず記念品の即売もなかったので観覧者の中には失望する向きもあったこと等も記録される。

『校友会月報』にはまた「卒業生姓名及卒業製作」の一覧も掲載するので、これを手がかりに写真を詳細観察し、被写体となったいくつかの作品を同定することができた。 以下にその観察の結果を列挙する。

①西洋画平常成績

展示はいずれも額装で、卒業制作にしばしばみられるような大型作品はなく、壁に3段に作品を懸ける。額縁は装飾の有無等により何種類か認められる。絵の主題としては木立や街路や水辺を描いた風景画、俯瞰構図の風景画、窓を背景にした室内人物画などが見える。生徒名・作品名の同定には現在のところ至っていないが、引き続き探索をしていきたい。

なお画面最奥に隣室の彫刻作品が見えており、鋳造科卒業制作の津田良治郎<鍾馗>(学生制作品 2944¹⁵、『目録』金工 II-437¹⁶)と思われる【図 3-① 部分】。

②漆工科

写真中央に甲谷公/吉田秀男/井上大次郎/笠井弥市/安 江雅勝/石塚章/杉本誠三<合作扇面屏風> (学生制作品 3084、『目録』漆工-470)、画面右には手板を展示する 【図 3-② 部分】。画面左のガラスケース内に見える印籠 や盆などは参考作品か。

「卒業生姓名及卒業製作」には高中文助<双去双来図 蒔絵額面>(学生制作品 3088、『目録』漆工-472)、磯



【図 3-①】部分



【図 3-②】部分

矢隆之<鯉蒔絵硯箱> (学生制作品 3087、『目録』漆工-472) を記載するが、写真中には確認ができなかった。

¹⁴ 「東京美術学校近事 第十八回卒業証書授与式」「同 成績品展覧会」『校友会月報』第7巻 第8号(明治42年4月27日)、『百年史 東京美術学校篇 第2巻』pp.447-449 ¹⁵ 大学美術館の所蔵品番号。以下同じ。

^{16 『}東京芸術大学芸術資料館 蔵品目録』の目録番号。以下同じ。

③日本画卒業製作

「卒業生姓名及卒業製作」との照合により、写真左から以下の5作品が確認される【図3-③ 部分】。

野原安司<高藤大納言>(学生生作品 230、『目録』絵画 II-816) 香川敬事<化銀杏>(学生生作品 231、『目録』絵画 II-813) 竹田豊太郎<秋の彩り>(学生生作品 232、『目録』絵画 II-814) 増田久太郎<神光>(学生生作品 233、『目録』絵画 II-817) 甲斐英雄<菊池武光>(学生生作品 234、『目録』絵画 II-812)

これは「卒業生姓名及卒 業製作」の記載順と一致す る。5名はいずれも明治37 年に予備の課程に入学、同 42年の卒業で¹⁷、展示順序 は入学年順でも五十音順で



【図 3-③】部分

もなく、あるいは成績順によるものであろうかと想像する。なお大学美術館の所蔵品データベースではいずれも掛幅装とするが、展示写真ではパネル装であり、文庫への収蔵前、もしくは収蔵後のいずれかの時点で改装されたと見られる。

4図画師範科

「卒業生姓名及卒業製作」に記載される作品の同定には至らなかったが、この翌年の明治43年の卒業制作(『目録』絵画 IIpp.193-195に掲載)を参照すると、縦110cm×幅50cm 内外の縦長画面に花鳥、山水、人物を描く作品群が写真中の展示品に類



【図 3-4】部分

似しているので、このサイズと題材が当時の師範科卒業制作の規格であったものと想像される【図 3-④ 部分】。写真中にはその他に創作文様の意匠画や、画面右奥室に西洋画とみられる額装の作品が認められる。卓上に置かれた物体が展示品であるかどうかは判然としない。

^{17 『}東京美術学校在籍者一覧(明治期入学者)』 https://gacma.geidai.ac.jp/archives/GACMA-enrollment-list01.pdf

⑤鋳造科

展示ケースの内部は参考品であろうか。「卒業生姓名及卒業製作」のうち山本貞治<不動尊>(学生制作品 2943 、『目録』金工II-439)と思われる鋳造像が、ケース外のガラス越しに見えている【図 3-⑤ 部分】。

その他の卒業製作、津田良治郎<鍾馗>(学生制作品 2944、 『目録』金工 II-437)と小野直平<羅漢>(学生制作品 2945、 『目録』金工-II438)は写真中には確認できない。ただし津田の< 鍾馗>は前述のとおり①西洋画平常成績の写真に写り込んだ作品に あたる可能性がある。この年の鋳造科卒業制作がいずれも器物など 工芸作品ではなく、古仏や神像に題材をとった鋳造像であったこと が興味深い。



【図 3-⑤】部分

⑥金工科

「卒業生姓名及卒業製作」に載る神谷甚一郎 <牡丹図額>(学生制作品 2800、『目録』金工 II-328)は写真中に確認できなかったが、展示ケース内に山田有方<銀製岩ニ鶺鴒>(学生制 作品 2762、『目録』金工 II-221、明治 30 年 卒業制作)、山下英夫<象香炉>(学生制作 品 4956、『目録』金工 II-284、明治 32 年卒



【図 3-⑥】部分 (左)鳥,(右)象



業制作)に似た鳥や象の作品が目に留まる。これらが該当するならば、過去の卒業制作品 もまた参考品として展示された事例となる。

⑦日本画平常成績

作品の特定には至らなかったが、写真の一番右が画面左方に走る群鶏を描いた白青天(田村寛二郎) <よぶかたへ> (学生制作品281、『目録』絵画 II-865) に似た群鶏図、また右から3点目は弓遊びに興じる童子を描いた柴田健次郎 < 戯> (学生制作品265、『目録』絵画 II-863) に通じる矢を射る人物群像に見える【図3-⑦】。白青天(田村寛二郎)は明治39年入学で同45年卒業、柴田健次郎も同39年入学で同44年卒業18であり、この





【図 3-⑨】部分 (左)矢を射る人物群像か,(右)群鶏図か

¹⁸ 『東京美術学校在籍者一覧(明治期入学者)』 https://gacma.geidai.ac.jp/archives/GACMA-enrollment-list01.pdf

年はいずれも在学中である。彼らの平常制作であるとすれば、卒業制作へ向けた構想の途中段階の作品かと想像する。

⑧日本画参考品

画面奥中央に伝尾形光琳<秋草図屛風>(東洋画真跡 526、目録』絵画 I・書跡-221)、左手に伝雪村<柳鷺図屛風>のうちの一隻(東洋画真跡 65、『目録』絵画 I・書跡-65)が見える。美校所蔵の古画の優品として、こうした機会に参考品として陳列されたものであろう。

⑨彫刻科

写真中に見える主要な作品はいずれも石膏像である。このうち、台座に貼られた付札の判読により、中央の裸体女性像が「卒業生姓名及卒業製作」に載る朝陰圓治郎<かほり>であることが判明する【図3-⑨】。本作は現在大学美術館に所蔵がなく、この写真でのみ確認できるという点で貴重である。同じく「卒業生姓名及卒業製作」に載る近藤三四<江戸の花>は、写真中に確認できなかった。奥の白い角柱に「木彫部」「牙彫部」の張り紙が見えており、画面奥の棚上や棚内に陳列されるのが木彫と牙彫の参考作品と見られる。

⑩図案科平常成績

作品の同定には至らないが、各所に「平常成績品陳列」「壹年級成績」「参年級成績」「卒業製作陳…」等の貼り紙が見え、卒業制作と各学年の平常成績が区画別に展示されていた状況が知られる。

写真の左方に見える「壹年級成績」では、植物写生を椀や盆のような器物の意匠に取り込む図案画が複数展示されており【図 3-⑩】、図案科の平常課題を彷彿させて興味深い。

以上のように、10枚の写真には膨大な情報量が含まれており、詳細な検討によりさらに多くの事実が明らかになるものと期待される。



【図 3-9】部分



【図 3-⑩】部分

おわりに 今後の課題と展望

卒業式および卒業制作に関する資料は、GACMAのみならず本学の各所に分置保管されている。これらの洗い出しは、東京美術学校に学んだ生徒と成績物としての卒業制作、その展示歴を明らかにする有意義な作業であることを実感した。今回は展示資料を中心に明治40年代までを考察の対象としたが、今後の展望の一つは時代をさらに広げること、二つめは制作費支給等の周辺資料についても精査を進め、個別の具体的な制作過程を解明していくことである。

卒業生の氏名と卒業制作の題目は『校友会月報』などに一覧が掲載され、また現在大学 美術館の所蔵品であれば実物を確認することができる。しかし成績品展覧会という一度限 りの展示風景が古写真に残り、文字資料と対照できたことは大きな収穫であった。写真の 精査により引き続き多くの知見が見出されよう。

いっぽうで、成績品展覧会で大きなウェイトを占める平常制作については、卒業生名簿や卒業制作の目録では追求しきれず、大学美術館に収蔵されてデータベースに掲載されていなければ探索には困難がともなう。平常制作に関する情報収集は今後の大きな課題となるだろう。

GACMAの今年度の成果として『東京美術学校在籍者一覧(明治期入学者)』の整備と公開が実現した。これにより入学と卒業だけではない、在学中の生徒動向が飛躍的に把握しやすくなった。こうした成果をもとに、大学史の基礎となる人物データと制作活動の紐付けを、さらに構築していきたい。

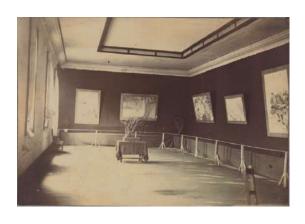
【図3】写真514(旧番号495)<四十二年三月 生徒成績品展覧会陳列物> 東京藝術大学大学美術館蔵



①西洋画平常制作



②漆工科



③日本画卒業制作



④図画師範科



⑤鋳造科 ⑥金工科





⑦日本画平常成績



⑧日本画参考品



⑨彫刻科



⑩図案科平常成績

【新収資料】南米岳関連資料(熊谷祐子氏寄贈)一括

古田 亮(美術学部近現代美術史・大学史研究センター センター長)

明治末から昭和初年にかけて美術団体「巽画会」を運営し、日本画家たちを支援した南 米岳(1870~1932)に関する一括資料。画家たちから米岳に宛てた書簡類を中心とするこ の資料は、米岳の孫にあたる故南幸子氏によって整理され大切に保存されてきた。本学の 教員や卒業生に関するものが多く含まれているが、同時に画家たちを支える立場から近代 美術史を語る貴重な資料である。

「異画会」は、1900 (明治 33) 年、松本楓湖門下の村岡応東らが立ち上げた研究会が 規模を拡大し研究会や展覧会を開催するようになったことにはじまる。1902 (明治 35) 年、まだ 30 代前半だった米岳は会の運営にかかわるようになり、出品画販売等で運営費 を賄うなど美術団体としての事業を推進していった。米岳は、自宅を開放して人体写生の 研究会を行うなど、物心共に同会を支える中心的存在となった。巽画会展の開催、美術雑 誌の発行、研究会や講和会の開催、さらに表具の技術意匠の発展のため表装競技会を開催 したことも特筆に値する。

明治 40 年代以降、巽画会に出品する画家たちは米岳を信頼してさまざまな相談事や旅 先からの便り、年賀状を寄せていた。その画家たちの中には、美校に関係する岡倉天心、 横山大観、菱田春草【図 1】、安田靫彦ら、ほかに今村紫紅【図 2】、高橋広湖、鏑木清 方らが含まれている。自筆の絵を描いてきた葉書もあり、各作家研究にとっても重要な資 料といえる。

岡倉天心が米岳に宛てた書簡3通は、1巻に表装されて箱に収められている【図3】。 米岳は若い頃から岡倉の考えに心酔していたようで、1908(明治41)年、岡倉が日本美 術院の画家らを糾合して結成した国画玉成会の幹事を引き受けている。書簡の内容は、こ の時のやりとりと五浦での観月会の相談である。

すでに紹介、翻刻されているものも含まれるが、一括寄贈を受けたことによって、今後 さらなる研究や活用が期待される。

〈参考文献〉

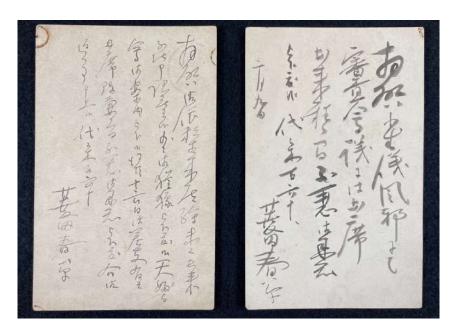
松浦あき子「院展草創期の画家と支持者 上一巽画会と南米岳一」『三彩』527 号、1991 年 8 月、p70-78

松浦あき子「院展草創期の画家と支持者 下一書簡にみる当時の日本画界一」『三彩』529 号、1991 年 10 月、p64-71

『岡倉天心全集 第六巻』平凡社、1980年

南幸子編『しのふくさ』(私家版)、1990年 [MB0253]

『日本美術院百年史 三巻下(資料編)』日本美術院、1994年、p323-339



【図1】

[上右] 巽画会展覧会事務局宛 菱田春草 葉書 (1910年3月9日) [MB0009] [上左] 南米岳宛 菱田春草 葉書 (1910年1月15日) [MB0010]

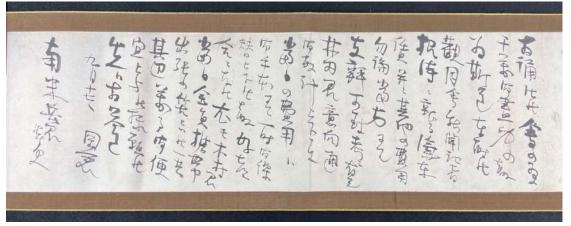
【図2】

[右] 南米岳宛 今村紫紅 葉書 (1914 年か) [MB0171]

【図3】

[下] 南米岳宛 岡倉天心 書簡(1908 年 11 月 12 日) [MB0023]





南米岳関連資料

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0001	南米岳宛 北野恒富 葉書	1929年4月1日	年賀状	1通
MB0002	南米岳宛 速水御舟 葉書	1929年4月1日	年賀状	1通
MB0003	南米岳宛 菱田春草 葉書	1909年12月13日	依頼画制作遅延の詫び状	1通
MB0004	南米岳宛 菱田春草 葉書	1909年12月20日	小包受領の返事	1 通
MB0005	あて先なし 菱田春草 葉書	1909年12月27日	依頼画完成の連絡	1通
MB0006	南米岳宛 菱田春草 葉書	1909年12月28日	依頼画完成の連絡	1通
MB0007	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年1月6日	依頼画完成の連絡	1通
MB0008	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年1月17日	絵絹三枚受領の連絡	1通
MB0009	巽画会展覧会事務局宛 菱田春草 葉書	1910年3月9日	審査会欠席の連絡	1通
MB0010	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年1月15日	天ぷら会欠席の連絡	1通
MB0011	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年1月21日	依頼画完成の連絡	1通
MB0012	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年7月11日	箱書き完成の連絡	1 通
MB0013	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年7月24日	依頼画完成の連絡	1通
MB0014	南米岳宛 菱田春草 葉書	1910年11月15日	返事	1通
MB0015	天ぶら會幹事御中 菱田春草 葉書	4月30日	天ぷら会欠席の連絡	1通
MB0016	南米岳宛 横山大観 葉書	1907年8月25日	印刷物送付の依頼	1 通
MB0017	南米岳宛 横山大観 葉書	1908年1月5日	来春展覧会開催の相談	1通
MB0018	南米岳宛 横山大観 葉書	1908年1月5日	画帖揮毫者人選の依頼	1通
MB0019	南米岳宛 横山大観 葉書	1910年6月28日	中国旅行中、漢口からの通信	1通
MB0020	南米岳宛 荒井寛方 書簡	5月15日		1通
MB0021	南米岳宛 岡倉天心 書簡	1908年11月21日	玉成会執務に関する御礼ほか	1通
MB0022	南米岳宛 岡倉天心 書簡	1908年11月22日	松本楓湖に関して通信	1通
MB0023	南米岳宛 岡倉天心 書簡	1908年9月17日	観月会について相談	1通
MB0024	南米岳宛 香川勝廣 書簡	1915年3月31日		1通
MB0025	南米岳宛 川村曼舟 書簡	1907年8月24		1通
MB0026	南米岳宛 川村曼舟 書簡	1912年3月23日		1通

整理番号	資料名			年月日	その他情報	員数
MB0027	南米岳宛	菊池契月	書簡	1月28日		1通
MB0028	南米岳宛	北野恒富	書簡	1914年3月31日		1通
MB0029	南米岳宛	木島櫻谷	書簡	不明		1通
MB0030	南米岳宛	原三溪 書	簡	2月19日	今村紫紅作品に関する問い合わせ	1通
MB0031	南米岳宛	菱田春草	書簡	1910年1月31日	依頼画完成の連絡	1通
MB0032	南米岳宛	菱田春草	書簡	1910年10月22日	「黒き猫」揮毫依頼に関する返答	1通
MB0033	南米岳宛	菱田春草	書簡	1910年11月8日	「黒き猫」領収書への添え状	1通
MB0035	南米岳宛	菱田春草	書簡	4月19日	揮毫依頼承諾の連絡	1通
MB0034	南米岳宛	菱田春草	書簡	1909年11月14日	依頼画制作について、延滞の詫び状	1通
MB0036	南米岳宛	菱田春草	書簡	10月8日	朝鮮旅行への勧誘に対し、腎臓病を理由に 断る	1通
MB0037	南米岳宛	菱田春草	書簡	1月10日	依頼画納品と画料受領の連絡	1通
MB0038	南米岳宛	松林楓湖	書簡	不明		1通
MB0039	南米岳宛	松林桂月	書簡	不明		1通
MB0040	南米岳宛	安田靫彦	書簡	1907年10月9日	五浦から帰京の連絡	1通
MB0041	南米岳宛	安田靫彦	書簡	1908年1月12日	玉成会に関する連絡、所感	1通
MB0042	南米岳宛	安田靫彦	書簡	1908年5月20日	異画帖拝受の御礼、美術界に関する所感	1通
MB0043	南米岳宛	安田靫彦	書簡	1908年12月11日	写生会欠席のこと、ほか通信	1通
MB0044	南米岳宛	安田靫彦	書簡	1912年3月14日	出品依頼に対して体調不良の連絡	1通
MB0045	南米岳宛	安田靫彦	書簡	不明		1通
MB0046	南米岳宛	横山大観	書簡	25日	印刷物受け取りの依頼	1通
MB0047	南米岳宛	横山大観	書簡	30日	五浦より、文展出品届に関する連絡	1通
MB0048	南米岳宛	横山大観	書簡	8月2日	遠山氏から依頼の画を届ける添え状	1通
MB0049	南米岳宛	横山大観	書簡	17日	林田氏の宿泊場所を尋ねる	1通
MB0050	南米岳宛	横山大観	書簡	不明		1通
MB0051	南米岳宛	横山大観	書簡	8月14日	岡倉天心に関する英文の手紙を大観が訳し て米岳に伝える	1通
MB0052	南米岳宛	横山大観	書簡	1908年5月22	北海道旅行に関する相談	1通

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
мВ0053	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年4月7日	風邪をひいて病床のあるとの連絡	1通
MB0054	南米岳宛 橫山大観 書簡	1908年9月10日	しばらく上京できない旨、連絡	1通
MB0055	南米岳宛 横山大観 書簡	1917年7月6日	帝室技芸員拝命に対してお祝いへの返礼	1通
MB0056	大野酒竹宛 横山大観 書簡	8月7日	医者の大野酒竹を紹介	1通
MB0057	南米岳宛 横山大観 書簡	7日	京都より、巽画会審査についての連絡	1通
MB0058	南米岳宛 横山大観 書簡	6日	中川氏の宿泊先を連絡	1通
MB0059	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年9月20日	仮寓先を連絡	1通
MB0060	南米岳宛 横山大観 書簡	1907年8月17日		I通
MB0061	南米岳宛 横山大観 封筒のみ3種	1908年3月26日ほか		3点
MB0062	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年1月14日	玉成会新年会のこと、画帖揮毫者人選のこ と	1通
MB0063	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年5月25日	春草の眼病について報告	1通
MB0064	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年9月21日	画料請求書	1通
MB0065	南米岳宛 横山大観 書簡	1931年8月14日	南米岳還暦の祝の作揮毫のこと	1通
MB0066	南米岳宛 横山大観 書簡	1908年3月26日	来月には上京したい旨、連絡	1通
MB0067	南米岳宛 橫山大観 書簡	9月24日	画料を一旦返却する使いへの添え状	1通
MB0068	南米岳宛 横山大観 書簡	18日	揮毫断りの連絡	1通
мвоо69	帝国美術院第三回美術展覧会陳列品目 録			1枚
мвоото	南進宛、茨城大学より通信	不明		書簡 7、集 書4
MB0071	米岳居士告別式 御来会者芳名	1932年4月14日		1 綴
MB0072	故米岳葬式会葬者芳名	1932年4月14日		1 綴
MB0073	原稿(上野の展覧会会場のこと)			12枚
MB0074	メモ (宮内省買上げ)			1 綴
MB0075	第13回巽画会審査結果			1枚
MB0076	大日本絵画著名大見立 明治四十四年 度改正			1点
MB0077	印章見本 篆刻師高畑翠石より			1枚 封筒1
MB0078	定款 合資会社巽画会			1級 封筒1

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0079	小宝翠雲肖像写真			1枚
MB0080	昭和38年11月5日 茨城大学 五浦美術 研究所 天心記念館 開館式 写真	1963年11月5日		1枚
MB0081	南米岳宛 横山大観 書簡 (封筒のみ)	不明		封筒 1
MB0082	南米岳宛 金島桂華 書簡	1931年7月24日	米岳の還暦記念品のお礼	1通
MB0083	南米岳宛 廣田** 書簡	1931年7月23日		1通
MB0084	南進宛 岡田華郷 書簡	1931年7月25日		1通
MB0085	南米岳・進宛 勝田哲 書簡	1931年10月27日		1通
MB0086	南米岳・進宛 古河一晃 書簡	1931年10月22日		1通
MB0087	南米岳宛 大倉喜七郎 書簡	1931年7月24日	米岳の還暦記念品のお礼	1通
MB0088	南進宛 野田九浦 書簡	1931年11月29日	進の妹への弔意	1通
MB0089	南進宛 小林柯白 書簡	1931年7月31日	米岳の還暦記念品のお礼	1通
MB0090	南米岳宛 小室翠雲 書簡	1931年7月19日	米岳の還暦記念品のお礼	1通
MB0091	南米岳宛 小泉勝や 書簡	1931年7月19日	米岳の還暦記念品のお礼	1通
MB0092	南米岳・進宛 前田荻郁 書簡	1931年10月23日	帝展特選に対する祝いのお礼	1通
MB0093	松林桂月書簡 封筒の断片	不明		1枚
MB0094	南米岳宛 足達壽邨連絡	不明	印章作成に関するメモ	1枚、 印章図 宏多数
MB0095	南米岳宛 鴨下晁湖書簡	1927年11月26日		1通
MB0096	南米岳宛 福田恵一書簡	1931年6月6日		1通
MB0097	南進宛 小松均書簡	1931年10月22日	帝展に対する批判あり	1通
MB0098	南米岳宛 竹内栖鳳書簡	1931年6月6日		1通
MB0099	南進宛 下村英時書簡	1959年9月22日	天心書簡集編集につき、所蔵の書簡閲覧希望	1通
MB0100	南進宛 下村英時書簡、葉書		天心の書簡を撮影したい (書簡) 、撮影後 のお礼状	各1通
MB0101	南進宛 下村英時書簡	1959年9月27日	天心書簡拝見のお礼	1通
MB0102	南進宛 下村英時書簡	1959年10月5日		1通
MB0103	南米進宛 下村英時書簡	1959年4月1日	転居の知らせ	1通
MB0104	鏑木清方 香典袋			1点

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0105	伊東深水 香典袋			1点
MB0106	牧野直晴 香典袋			1点
MB0107	南進宛 上村松篁書簡	1957年2月1日	米岳夫人他界へのお悔やみ状	1通
MB0108	南進宛 牛田谿村書簡	1957年2月5日	米岳夫人他界へのお悔やみ状	1通
MB 0 10 9	南進宛 松尾晃華書簡	1957年1月6日	米岳夫人他界へのお悔やみ状	1通
MB0110	南米岳宛 安田靫彦 書簡	1932年8月27日		1通
MB0111	鏑木清方より照「百日祭」の記念品送 付	1970年5月		1点
MB0112	南進宛 鏑木清方書簡	1970年5月	照の葬式参列への礼状	1通
MB0113	南進宛 鏑木清方書簡	1957年2月1日	現金書留 米岳夫人他界へのお悔やみ状	1通
MB0114	南進宛 小林通書簡	1958年4月	小林古径命日の挨拶	1通
MB0115	南進宛 穴山勝堂書簡	1957年2月24日	米岳夫人他界へのお悔やみ状	1通
MB0116	南進宛 東京国税局長より通知	1966年10月21日	納税表彰式への案内	1通
MB0117	南進宛 太田朝雨電報	1957年2月5日	米岳夫人他界への弔電	1通
MB0118	南進宛 望月春江電報	1957年2月5日	米岳夫人他界への弔電	1通
MB0119	南進宛 小林三季葉書		米岳夫人他界へのお悔やみ状	1枚
MB0120	南米岳宛 村岡応東 葉書	1912年5月21日	【自筆絵】	1通
MB0121	南米岳宛 山田徳天 葉書	不明	【自筆絵】	1通
MB0122	南米岳宛 村岡応東 葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0123	南米岳宛 西山翠嶂葉書	不明	年賀状【自筆絵】	1通
MB0124	南米岳宛 安田靫彦葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0125	南米岳宛 西山笛畝葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0126	南米岳宛 鷹田其石葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0127	南米岳宛 松林篤葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0128	南米岳宛 橋本邦助葉書	1929年1月	年賀状	1 通
MB0129	南米岳宛 五島耕畝葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0130	南米岳宛 中島光村葉書	1928年1月	年賀状	1通

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0131	南米岳宛 木村武山葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0132	南米岳宛 松林桂月葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0133	南米岳宛 安田靫彦葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0134	南米岳宛 葉書	不明	年賀状	1通
MB0135	南米岳宛 葉書	不明	年賀状	1通
MB0136	南米岳宛 小室翠雲葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0137	南米岳宛 佐竹永陵葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0138	南米岳宛 鴨下晁湖葉書	1928年1月	年賀状	1通
мв0139	南米岳宛 尾竹国観葉書	不明	年賀状	1通
MB0140	南米岳宛 堅山南風葉書	1928年1月	年賀状	1通
MB0141	南米岳宛 佐竹永陵葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0142	南米岳宛 尾竹国観葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0143	南米岳宛 鴨下晃湖葉書	1929年1月	年賀状【帝展第9回絵葉書】	1通
MB0144	南米岳宛 川端龍子葉書	1929年1月16日		1通
MB0145	南米岳宛 小室翠雲葉書	1929年5月16日	長門萩城写真	1通
MB0146	南米岳宛 勝田蕉琴葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0147	南米岳宛 山口*平葉書	1923年10月27日		1通
MB0148	南米岳宛 清水繁一葉書	1930年4月		1通
MB0149	南米岳宛 田中頼嶂葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0150	南進宛 上原古年葉書	1937年6月	転居通知	1通
MB0151	南米岳宛 関直彦葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0152	南米岳宛 田中賴暲葉書	不明	年賀状	1通
MB0153	南米岳宛 磯田長秋葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0154	南米岳宛 中島光村葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0155	南米岳宛 堅山南風葉書	1929年1月	年賀状	1通
MB0156	南米岳・進宛 山村耕花	1929年1月	年賀状	1通

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0157	南米岳宛 松林桂月葉書	1929年1月		1通
MB0158	南米岳宛 中島光村葉書	1934年7月27日	【自筆絵】	1通
MB0159	南米岳 高橋広湖葉書	1910年3月23日	【自筆絵】	1 通
MB0160	南米岳 高橋広湖葉書	1911年8月11日	【自筆絵】五浦岡倉先生方宛	1通
MB0161	南米岳 高橋広湖葉書	不明	【自筆絵】江の島金亀楼より	1通
MB0162	南米岳 高橋広湖葉書	1931年6月6日	【自筆絵】上賀茂より	1通
MB0163	南米岳 高橋広湖葉書	1936年5月15日	【自筆絵】春日山	1 通
MB0164	南米岳 高橋広湖葉書	1911年	【自筆絵】五浦岡倉様方宛	1通
MB0165	南米岳 高橋広湖葉書	1910年2月26日	【自筆絵】大原女	1通
MB0166	南米岳 高橋広湖葉書	1908年5月18日	【自筆絵】葵祭	1通
MB0167	南米岳 高橋広湖葉書	1910年8月1日	【自筆絵】栗田口辺りにて	1通
MB0168	南米岳 高橋広湖葉書	1908年5月17日	【自筆絵】若草山	1通
MB0169	南米岳 高橋広湖葉書	1908年2月6日	【自筆絵】	1通
MB0170	南米岳 保間素堂葉書	1907年5月19日	【自筆絵】大原女	1通
MB0171	南米岳 今村紫紅葉書	不明	【自筆絵】	1通
MB0172	南進宛 若林翠光葉書	1941年10月4日	田口静樹追悼会欠席の知らせ	1通
MB0173	南進宛 田中青坪葉書	1941年10月7日	田口静樹追悼会欠席の知らせ	1 通
MB0174	南進宛 小早川清葉書	1941年10月5日	田口静樹追悼会欠席の知らせ	1通
MB0175	南進宛 高橋喜一葉書	1941年10月6日	田口静樹追悼会出席の知らせ	1通
MB0176	南進宛 鈴木麻古茶葉書	1941年10月3日		1通
MB0177	南進宛 吉田章信書簡(封筒のみ)	不明		1通
MB0178	南進宛 田中以知庵葉書	1932年2月5日	米岳の訃報に接し弔意	1通
MB0179	故太田聴雨の会葬お礼	1958年3月5日		1通
MB0180	印譜集		山元春挙ほか	1 帖
MB0181	印譜集		福田平八郎、横山大観、上村松闌ほか	1 帖
MB0182	自筆画家名簿帳	不明		1 ₩

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0183	南米岳翁還曆記念 絵画展覧会寄贈品 台帳	1931年		1 1111
MB0184	『異』合本		昭和4年4月、5月、6月、7月、11月、12 月、昭和5年1月、4月、唱和6年1月	1 ∰
MB0185	『多都美』合本		8-19 (大正3年11月) 、8-20 (大正3年12 月) 、9-1 (大正4年1月) 、9-2 (大正4年2 月) 、9-3 (大正4年3月) 、9-4 (大正4年4 月) 、9-5 (大正4年5月) 、9-6 (大正4年6 月) 、9-7 (大正4年7月) 、9-8 (大正4年8 月) 、9-9 (大正4年9月) 、9-10 (大正4年10月)	1 冊
MB0186	還暦祝展覧会 アルバム		会場写真、作品	1 🚻
MB0187	紙燒作品写真			1枚
MB0188	紙燒作品写真		小茂田青樹	1枚
MB0189	紙焼作品写真			1枚
MB0190	紙燒作品写真		落合朗風	1枚
MB0191	紙焼作品写真		土田麦僊	1枚
MB0192	紙燒作品写真			1枚
MB0193	紙焼作品写真		小茂田青樹	1枚
MB0194	紙燒作品写真			1枚
MB0195	紙焼作品写真		安田靫彦	1枚
MB0196	紙焼作品写真			1枚
MB0197	紙焼作品写真		小室翠雲	1枚
MB0198	紙焼作品写真		福田平八郎	1枚
MB0199	紙焼作品写真		堅山南風	1枚
MB0200	紙燒作品写真			1枚
MB0201	紙焼作品写真			1枚
MB0202	紙焼作品写真			1枚
MB0203	紙焼作品写真		上村松篁	1枚
MB0204	紙焼作品写真			1枚
MB0205	紙焼作品写真			1枚
MB0206	紙焼作品写真		(作品3点)	1枚

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0207	紙焼作品写真		荒井寛方	1枚
MB0208	紅焼作品写真		鏑木清方 一葉女史の墓	1枚
MB0209	紙焼作品写真		鏑木清方 馬琴	1枚
MB0210	紙焼作品写真		牛田鶏村	1枚
MB0211	紙焼作品写真			1枚
MB0212	紙焼作品写真			1枚
MB0213	紙焼作品写真			1枚
MB0214	紙焼作品写真			1枚
MB0215	紙焼作品写真			1枚
MB0216	紙焼作品写真			1枚
MB0217	紙焼作品写真			1枚
MB0218	紙燒作品写真			1枚
MB0219	紙焼作品写真			1枚
MB0220	紙焼作品写真			1枚
MB0221	紙燒作品写真			1枚
MB0222	紙焼作品写真			1枚
MB0223	紙焼作品写真			1枚
MB0224	紙焼作品写真		鏑木清方	1枚
MB0225	紙燒作品写真		鏑木清方	1枚
MB0226	紙焼作品写真		鏑木清方 ためさるる日	1枚
MB0227	紙焼作品写真		鏑木清方	1枚
MB0228	紙焼作品写真			1枚
MB0229	紙焼作品写真			1枚
MB0230	紙焼作品写真			1枚
MB0231	紙焼作品写真			1枚
MB0232	紙焼作品写真			1枚

整理番号	資料名	年月日	その他情報	員数
MB0233	紙燒作品写真			1枚
MB0234	紙焼作品写真			1枚
MB0235	紙焼作品写真			1枚
MB0236	紙燒作品写真		奥村土牛	1枚
MB0237	紙焼作品写真			1枚
MB0238	紙焼作品写真			1枚
MB0239	紙燒作品写真			1枚
MB0240	紙焼作品写真			1枚
MB0241	紙焼作品写真			1枚
MB0242	紙燒作品写真		水上泰生	1枚
MB0243	紙焼作品写真			1枚
MB0244	紙焼作品写真			1枚
MB0245	紙焼作品写真			1枚
MB0246	紙焼作品写真			1枚
MB0247	故春草遺族扶助料の領収書	1911年12月14日		1枚
MB0248	竹内栖鳳 木版 鯛図			2枚
MB0249	署名 寄せ書き			1枚
MB0250	領収書			4枚
MB0251	包み紙			1枚
MB0252	包み紙			1枚
MB0253	『しのふくさ』	1990年	南進著、南幸子編	1 册

【研究会発表要旨】

「東京美術学校在籍者一覧一作成意義と活用に向けて一」

浅井ふたば(近現代美術史・大学史研究センター 学術インストラクター)

「東京美術学校在籍者一覧」とは、東京藝術大学美術学部の前身である東京美術学校 (明治 22 年開校、昭和 27 年閉校)に在籍した生徒の情報を掲載したデータベースであ る。当センターの学生アルバイト(工藤沙貴、髙柳祿、富岡萌夏、村山晶彦)を中心に 2021 年 6 月からデータ入力を開始し、2022 年 1 月末、まずは明治期に入学した生徒約 2,000 人の情報を当センターWebページで公開した。今回の発表では、「東京美術学校在 籍者一覧」の紹介を目的として、その作成、意義、活用について説明した。

1. 東京美術学校在籍者一覧の作成

「東京美術学校在籍者一覧」は、氏名、入学年、入学科、出身地、卒業年、卒業科、最終在籍年、最終在籍科、改姓名、雅号、検索用表記の項目で構成されている。

まず、各年度の『東京美術学校一覧』(東京美術学校、明治23年~昭和14年、国会図書館のデジタルコレクションで公開)の「生徒姓名」より、1年生の姓名が記載されている頁を参照して、氏名、入学年、入学科、出身地を入力した。次に、『東京美術学校一覧』の「卒業生名簿」の頁を参照して、各生徒の卒業年、卒業科、雅号を入力した。「卒業生名簿」に名前が記載されない中途退学者もしくは再入学者は、『東京美術学校一覧』の「生徒姓名」を参照して最終在籍年・科を入力した。入学後に氏名を変更した生徒については改姓名を加えた。また氏名、改姓名、雅号で使用されている表記について、常用漢字を中心に作成した検索用表記を入力して検索にかかりやすいようにした。

『東京美術学校一覧』は昭和 14 年度までしか発行されなかったため、昭和 15 年度以降に入学した生徒は、氏名、入学年・科、出身地については『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第 3 巻(芸術研究振興財団®、東京芸術大学百年史刊行委員会、平成 9 年)を参照して入力した。卒業年・科、雅号については、東京藝術大学美術学部同窓会よりご提供いただいた『杜の会会員名簿』のデータを参照して入力した。

2. 東京美術学校在籍者一覧の意義

意義の一点目は、「在籍者情報の一元化」である。そもそも、日本の近代美術の発展を 担った東京美術学校に誰が在籍していて、何人いたのか、その全容を把握できていなかっ た。ばらばらになっていた在籍者の情報を一元化し、一覧表にまとめて「見える化」した ことに「東京美術学校在籍者一覧」の意義がある。 二点目は、「利用者の利便性向上」である。当センターには「××は東京美術学校に在籍していたか?」という個人の在籍確認の問い合わせが多く寄せられ、その対応に時間を要していた。同様の問い合わせは当センターだけでなく学内関連部署にも届く。「東京美術学校在籍者一覧」は個人の情報をすばやく検索することが可能であり、各部署において問い合わせ対応の効率化を図ることが期待できる。

三点目は、「研究データとして活用」である。東京美術学校に在籍した生徒の情報を集積すると、同時に学校組織がどのような活動を行なってきたのかというその経緯も明らかになった。「東京美術学校在籍者一覧」は本学の歴史(自校史)について考えるための研究データとして活用できると考える。

3. 東京美術学校一覧の活用

上記で説明したように、「東京美術学校在籍者一覧」は本学の歴史(自校史)を理解するためにも役立つ。本学の過去と現在をつなぐツールとして活用できるよう、着眼点として次の三点について説明した。

着眼点の一点目は「変遷・推移」である。東京美術学校に在籍した生徒の情報を集積した結果、学校組織の変遷・推移の状況も浮かび上がった。過去の新設学科や廃止学科について、なぜそうなったのか、その背景について考えることは、現在の美術をとりまく諸情勢を理解することにもつながると思われる。

着眼点の二点目は「教員養成課程」である。「東京美術学校在籍者一覧」を作成し、東京美術学校時代、作家養成と同時に教員養成にも力を入れていたことが改めてわかった。 教員養成課程に在籍した生徒は、卒業後に全国各地の美術教員となり、近代日本美術の基盤を支える重要な役割を果たしたと考えられる。卒業生の活動状況を把握することは、国立の美術大学が果たす公的役割について今一度考えるきっかけとなるだろう。

着眼点の三点目は「柔軟な教育課程」である。明治期の修学状況をみると、飛び級の生徒が散見された。このことから、当時、個人の能力にフレキシブルに対応する教育課程があったことがうかがえる。また一方で、中途退学者がかなり多いことも確認できた。この状況について、教育コースから脱落する者もいたであろうが、「卒業」を最終目的としない柔軟な教育課程があったのではないかと推測できる。多様な学生や教育ニーズに対応していた当時の状況を明らかにすることは、現在の大学運営の課題解決にも役立つだろう。

今後の課題としては、まずは大正期及び昭和期の在籍者情報を公開することが最優先であるが、将来的にはデータベースの性能性を向上させ、情報へのアクセス性を高める検索システムを構築できればと考えている。

「東京美術学校在籍者一覧」作成にご協力いただきました、公益財団法人鹿島美術財団 と東京藝術大学美術学部同窓会杜の会の皆様に感謝申し上げます。

【研究会発表要旨】

「記録と証言による東京芸術大学取手校地史の構築の試み -継承のかたちを求めて」

田中ジョン直人

(東京芸術大学大学院国際芸術創造研究科 Project Music Bridge 特任助手)

筆者は東京芸術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻への入学以来、茨城県取手市(以下「取手」)に所在する東京芸術大学取手校地(以下「取手校地」)について、その計画、整備および利用がどのように行われてきたかを調査し、修士論文にまとめた。今回の発表では、現在地での開設に至る経緯について、どのように調べたかについて重点的に取り上げながら「取手校地史」として時系列順に述べ、今後の展望について紹介した。

取手校地の開設までの経緯は筆者の周りの学生や教職員にはよく知られておらず、関連する記述のある文献も少ない中での調査となった。『東京芸術大学百年史』でも取手にキャンパスが設置された経緯は詳しく触れられていないが、『芸高創立 50 周年記念誌 芸高の半世紀』では、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校(以下「芸高」)田村学校長の1987年の書簡として「取手地区取得のため、その見返り財源として現実に授業を行っている附属高校のお茶の水地区売却という重大事項が、学長、局長及び美術学部の一部教官、そして文部省の一部行政官によって決定された」とある。この記述の背景を知るために、学内外の刊行物から当時の事象や会議の日付を把握し、合わせて法人文書の開示請求を通じて当時の記録を入手し調査するとともに、関係者への聞き取り取材を行なった。

取手に東京芸術大学のキャンパスを設置する構想は、1980年に東京芸術大学事務局長に就任した白井實氏が、旧制高校の同級生で取手出身の衆議院議員であった葉梨信行氏に、奏楽堂問題などにより東京芸術大学の上野の敷地が手狭となっていると伝えたことが発端であった。そして同年に教官による取手市内の候補地3カ所の視察で、利根川に夕日が沈む景色が美しいという理由などから小文間地区の現在地に事実上決定したことが、葉梨氏および同行した当時の取手市職員の証言により分かった。以降、学内で施設などの利用計画の策定が進行、1984年には用地取得費が計上され、以降土地収用が進められたことが、当時の新聞記事および学内の会議録から読み取れる。一方、取手校地の土地取得の財源に、中曽根内閣の財政再建政策として、芸高が設置されていた神田駿河台の「お茶の水校地」の土地が国有地開放による民間払い下げの候補地としてリストアップされたことが新聞で報道されてしまう。この翌日の東京芸術大学の定例評議会議事要録では、この会議では盛んに「意見交換」が起こった様子がうかがえる。これらの経緯を経て、取手校地は1991年10月に開設される。一方芸高は1995年に上野校地に移転し、1997年に「お茶の水校地」は公立学校共済組合に売却され、現在は同組合の本部となっている。

取手校地の歴史は東京芸術大学の中ではあまり語られてこなかった一方で、取手市の側では多くの関係者が筆者の聞き取りに応じ、説明してくれた。筆者はウェブ上で修士論文および関連資料の一部を公開するとともに、取手校地内の食堂の2階に、取手アートプロジェクトの協力のもと、開設以降を含む取手校地および立地する小文間地区の歴史について知ることのできるコーナーを設けて、その歴史の継承のかたちを模索している。

6、名簿

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター 運営委員会

日比野克彦 (美術学部長)

(以下五十音順)

光井 渉 (建築科 教授)

荒井 経 (大学院美術研究科 文化財保存学日本画専攻 教授)

黒川廣子(大学美術館館長/教授)

斎藤典彦(日本画科 教授)

佐藤道信(芸術学科 教授)

李 美那 (大学院美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻 准教授)

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター (GACMA)

古田 亮 (センター長/ 大学美術館 教授[兼])

浅井ふたば (学術インストラクター)

芹生春菜 (学術インストラクター)

嘉村哲郎(芸術情報センター 准教授)

本年度の当センターの活動にあたって、公益財団法人鹿島美術財団様より助成を賜りました。厚く御礼申し上げます。

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター年報・紀要 令和3年度(2021)

編集・発行 東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター 発行日 2022 年 5 月 31 日

GACMA: GEIDAI Archives Center of Modern Art

110-8714 東京都台東区上野公園 12-8

https://gacma.geidai.ac.jp/